





五曜文庫

董高藏書

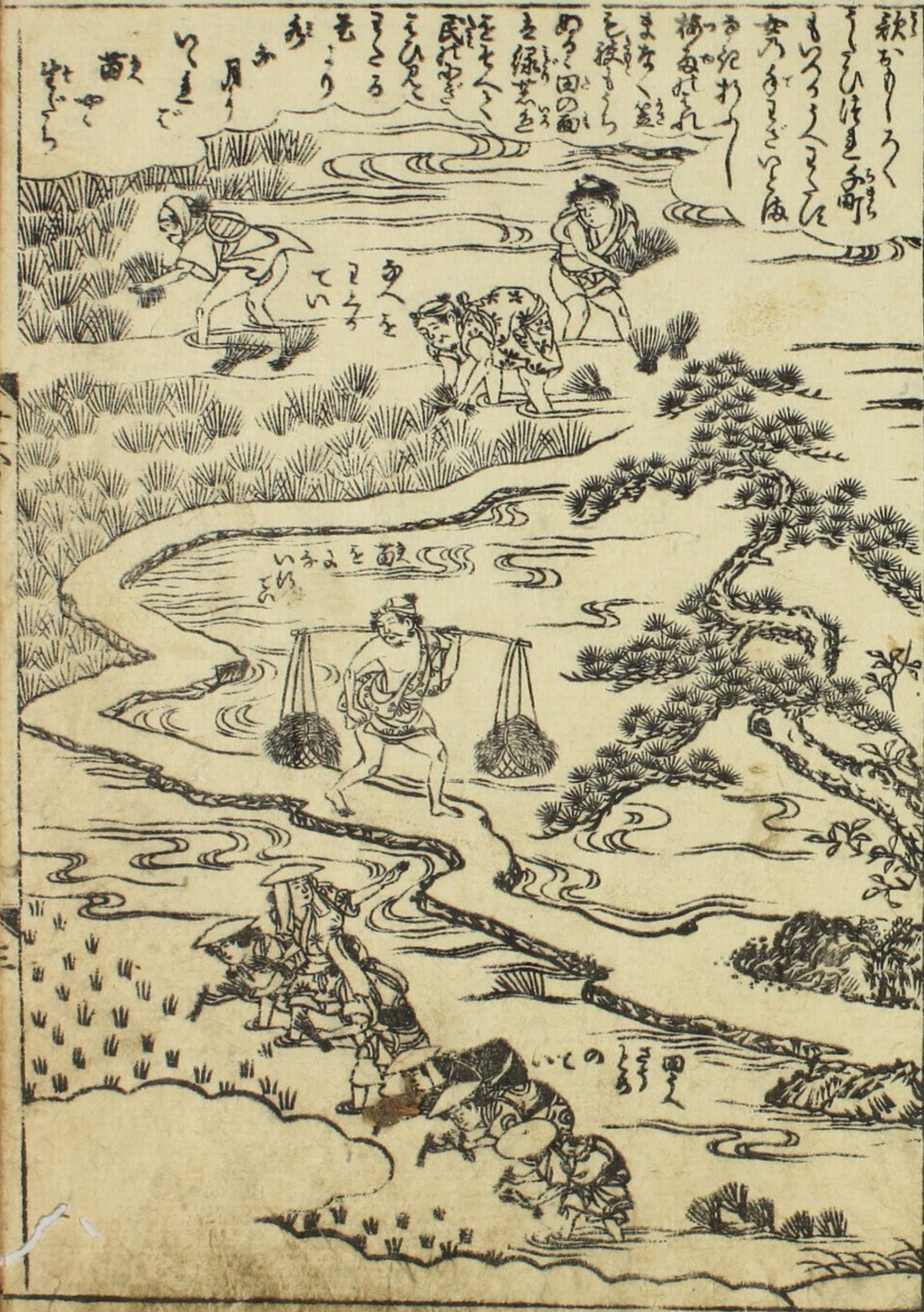


具原先生

浪花書肆

稱觥堂藏

女學寶鑑



京南

南無堂花
二條
花のあき
新れ
しこの花
なほはハ
うをうけくけう
りへひ



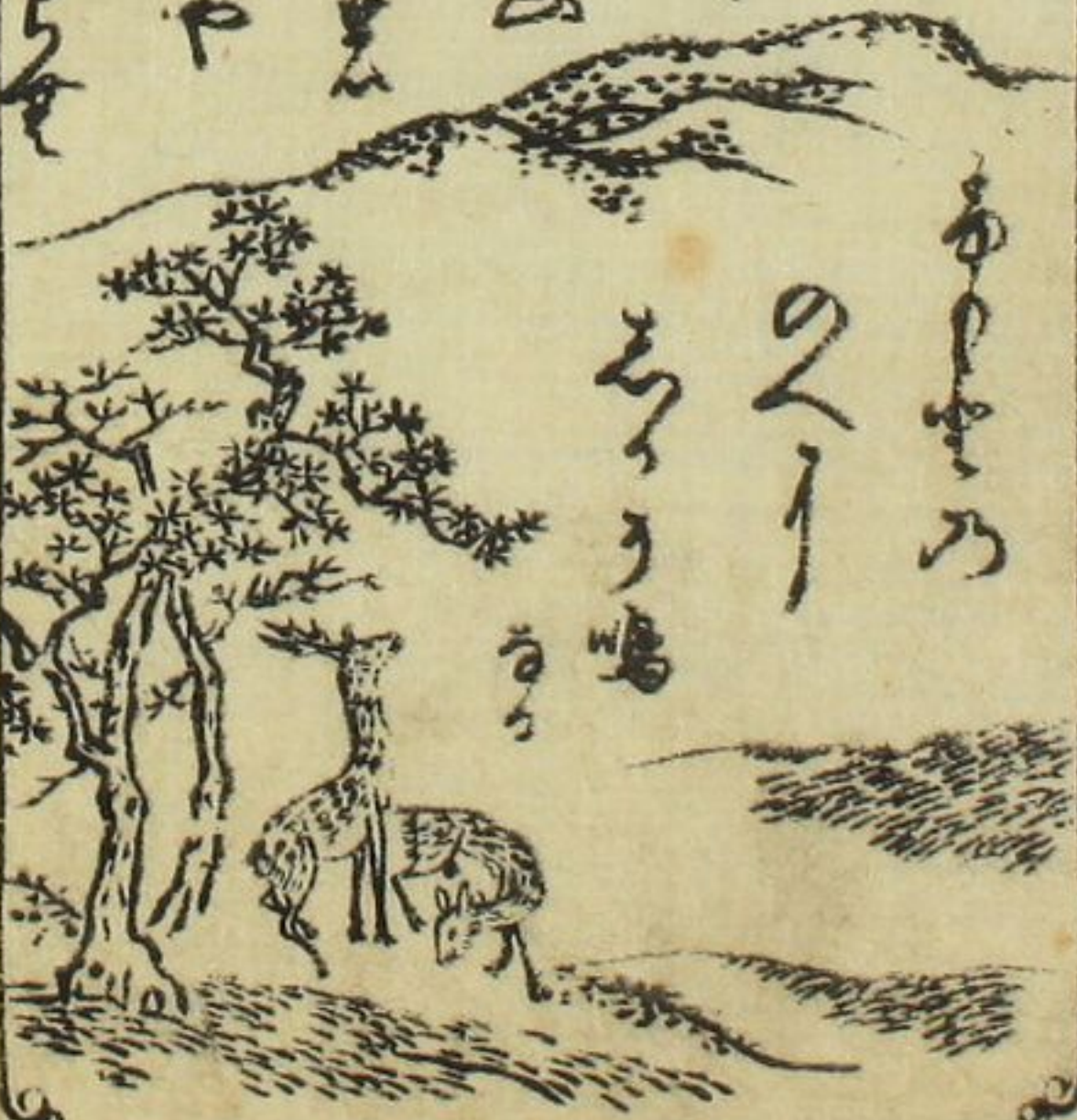
佐保川景
お田舎 三東
中へわくろ
いそよそ
して
海川の
何うけり
あうれ



猿沢池月
左近清持の
花不飛幸持
も余
かゝ
流り
水



春日野原
持中細去
公持
のい
あ
さひ



八景

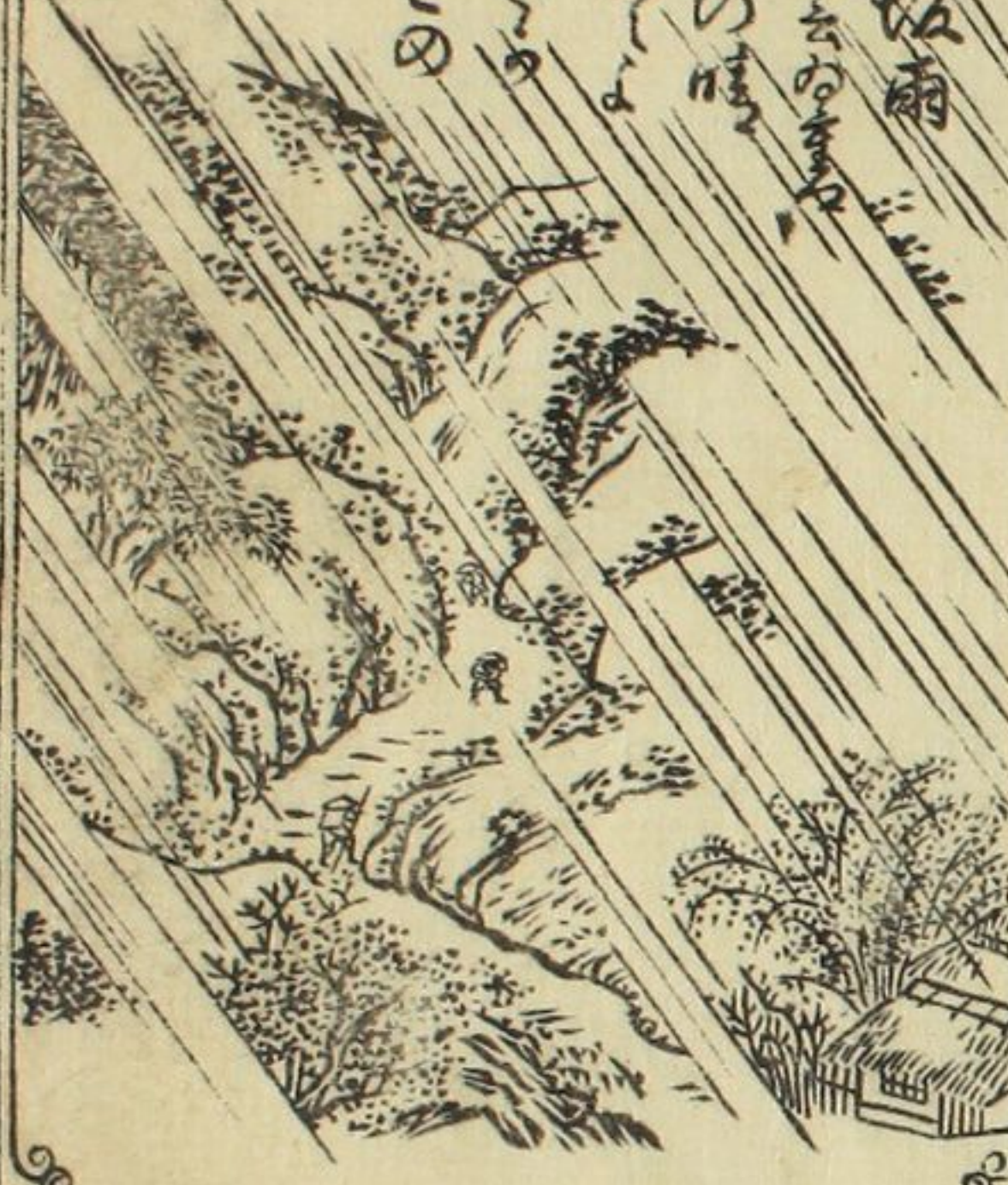
三笠山景
茶右大臣
見うさ
さして
さの光と
向きつ
ん
神やま



東大寺鐘
お方御
四辻乃
をくおの
花つら
あり
のひ



雲井坂雨
持中細去の
ひの雨の時
あふ
中
わ
ら



夷橋ゆへ
お中細去小舎
あけり
ま
あつ
うた



色紙和歌

月二十

二月
 打ちひさき
 まくら
 風のさざれ
 日となく
 ま柳れり
 まくら
 まくら
 まくら



柳

三月
 けまれ
 うさぎとや嘆
 若乃
 うさぎ
 うさぎ
 うさぎ
 うさぎ
 うさぎ



うさぎ

二月
 村人の産り
 まくら
 まくら
 まくら
 まくら
 まくら
 まくら
 まくら



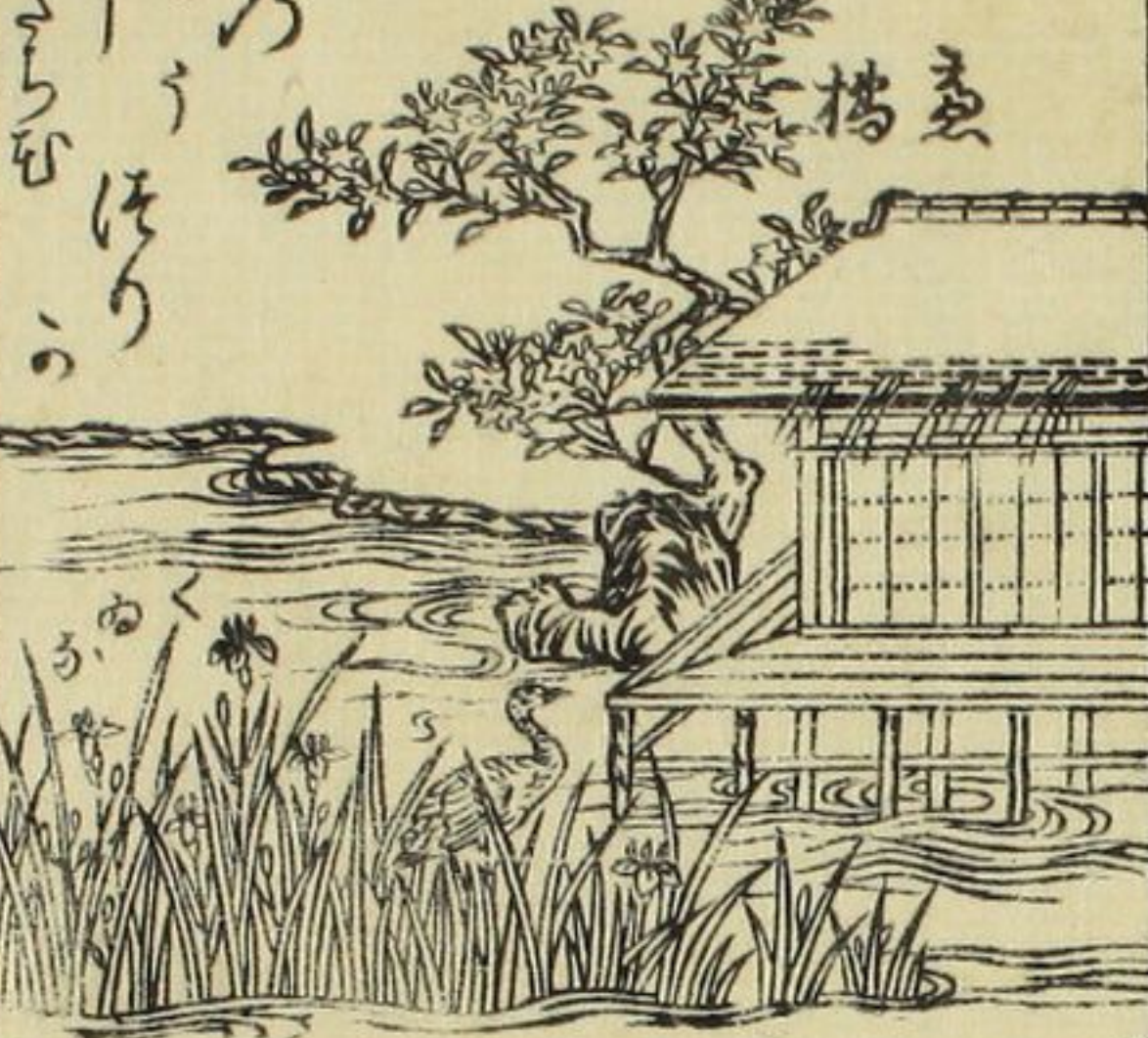
鳥

四月
 白少れ衣
 まくら
 まくら
 まくら
 まくら
 まくら
 まくら
 まくら



花

六月
 桔戸と
 まくら
 まくら
 まくら
 まくら
 まくら
 まくら
 まくら



橋

七月
 妹なして
 まくら
 まくら
 まくら
 まくら
 まくら
 まくら
 まくら



鳥

六月
 大くれ目頼り
 まくら
 まくら
 まくら
 まくら
 まくら
 まくら
 まくら



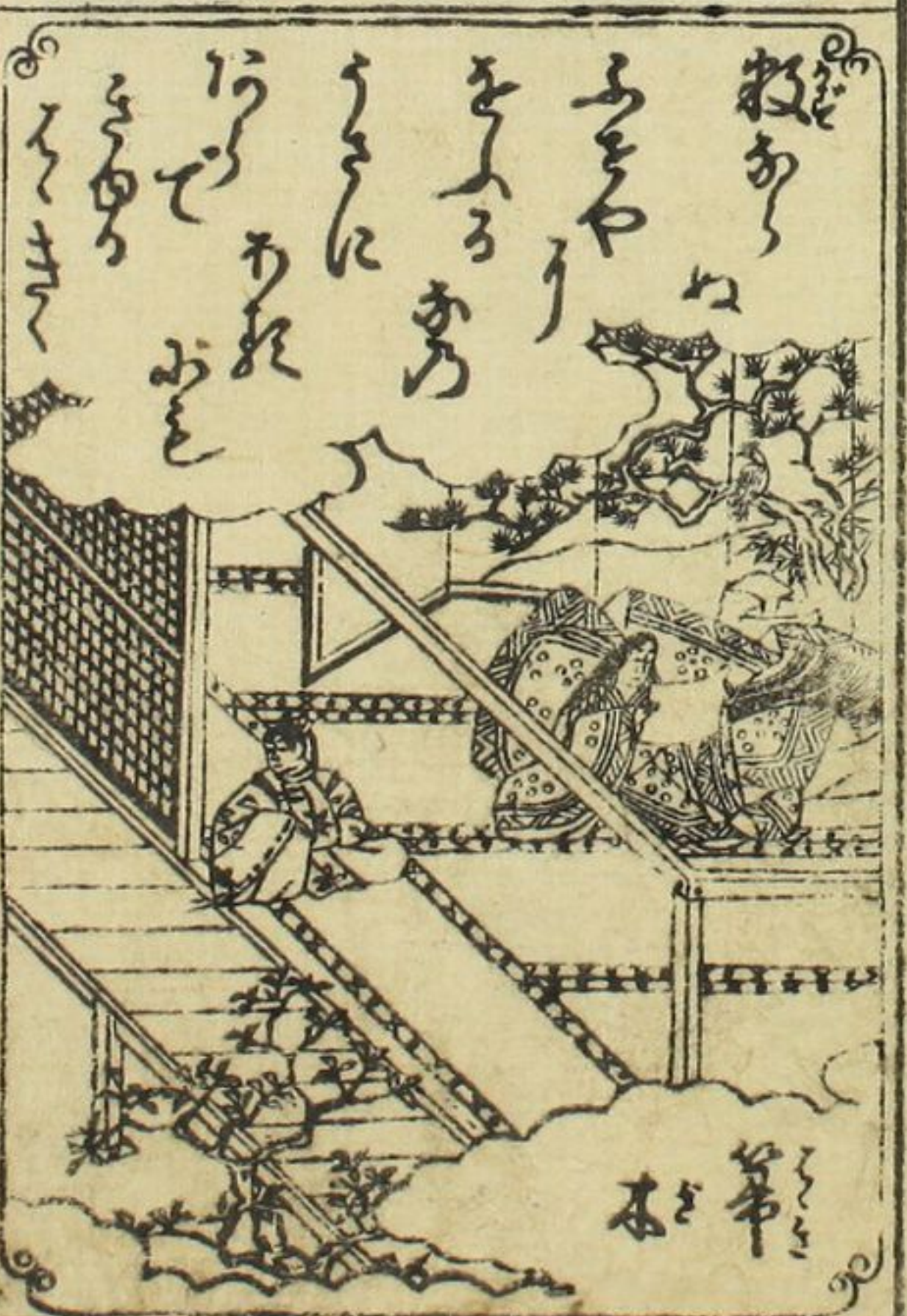
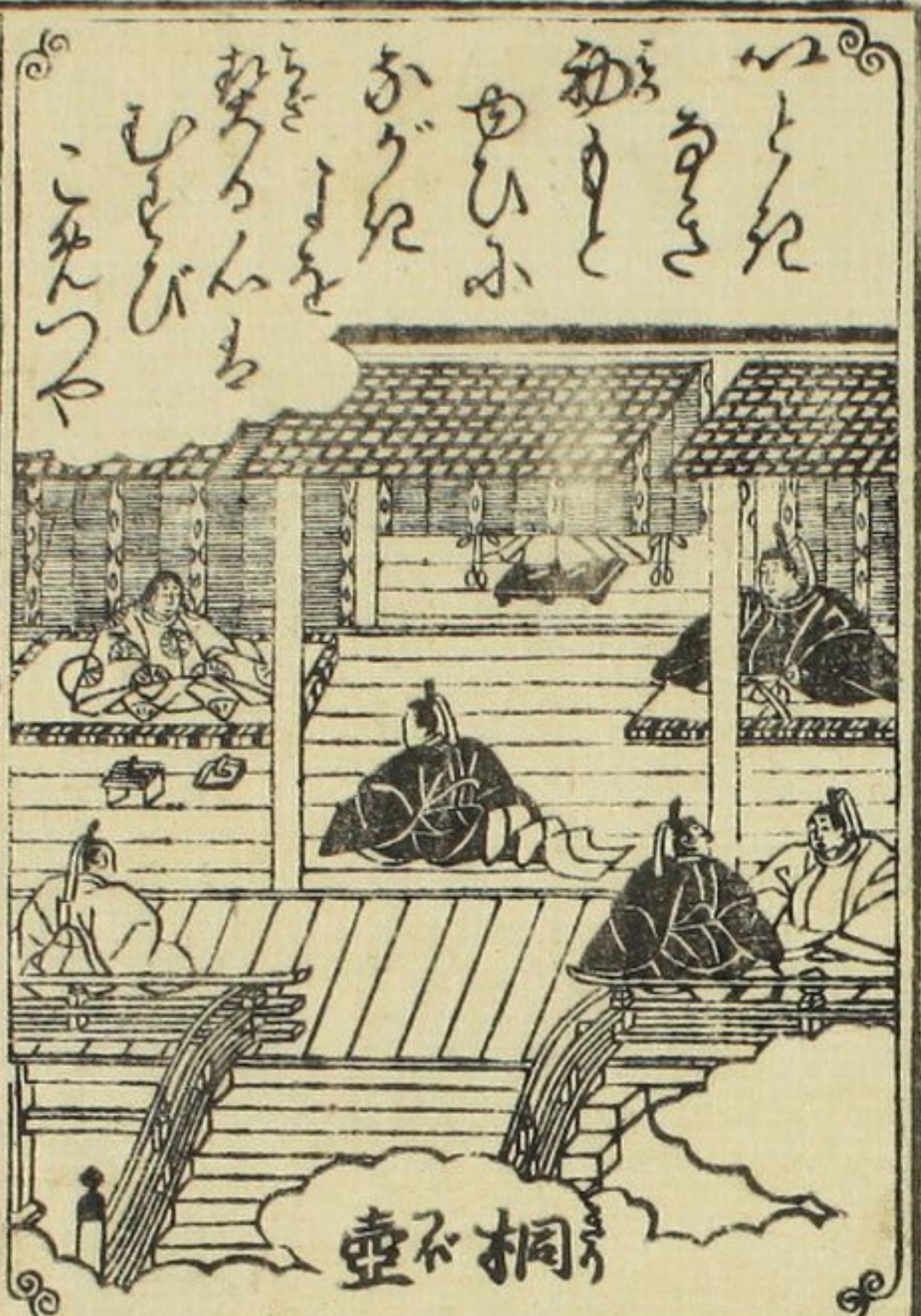
舟

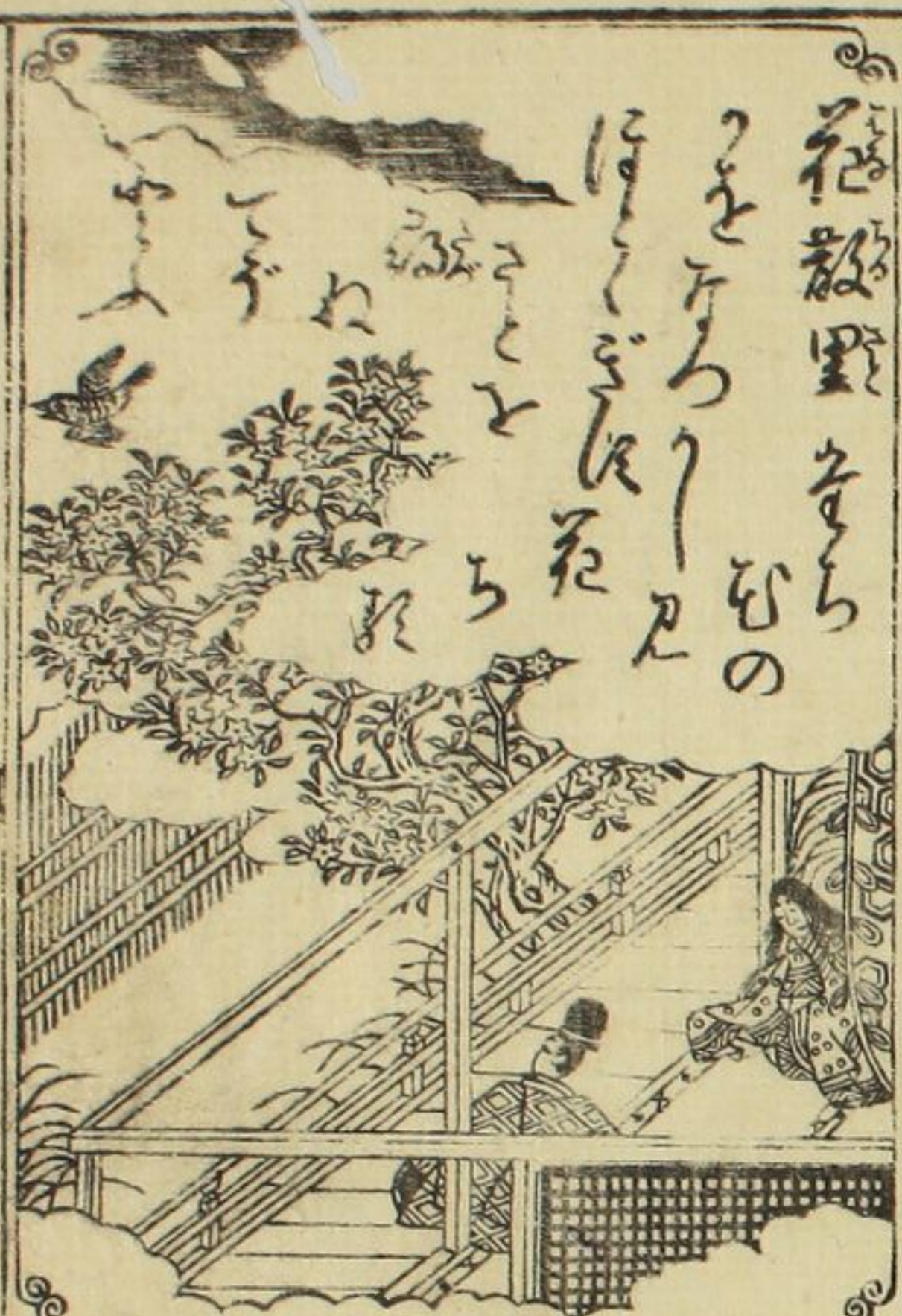
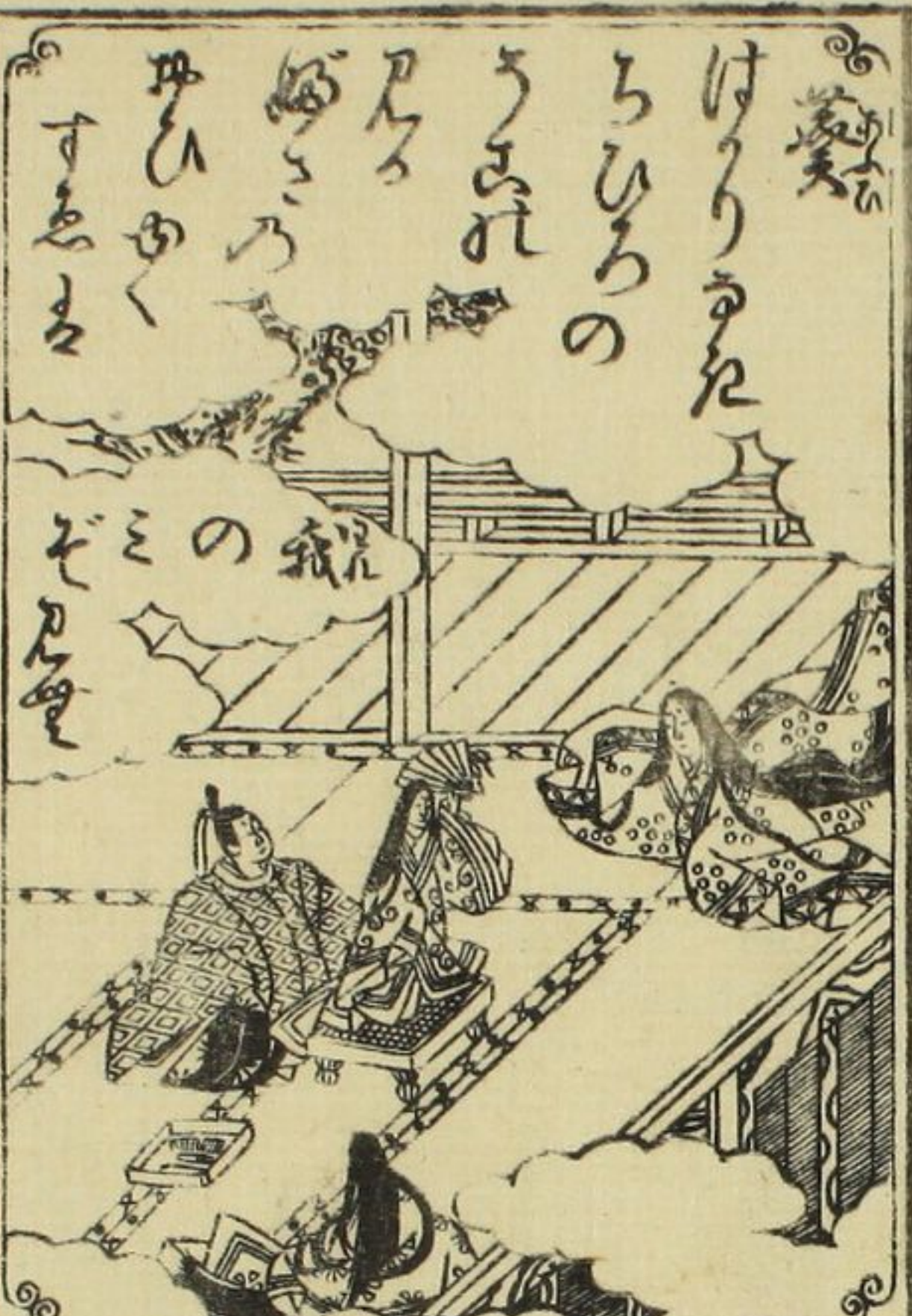
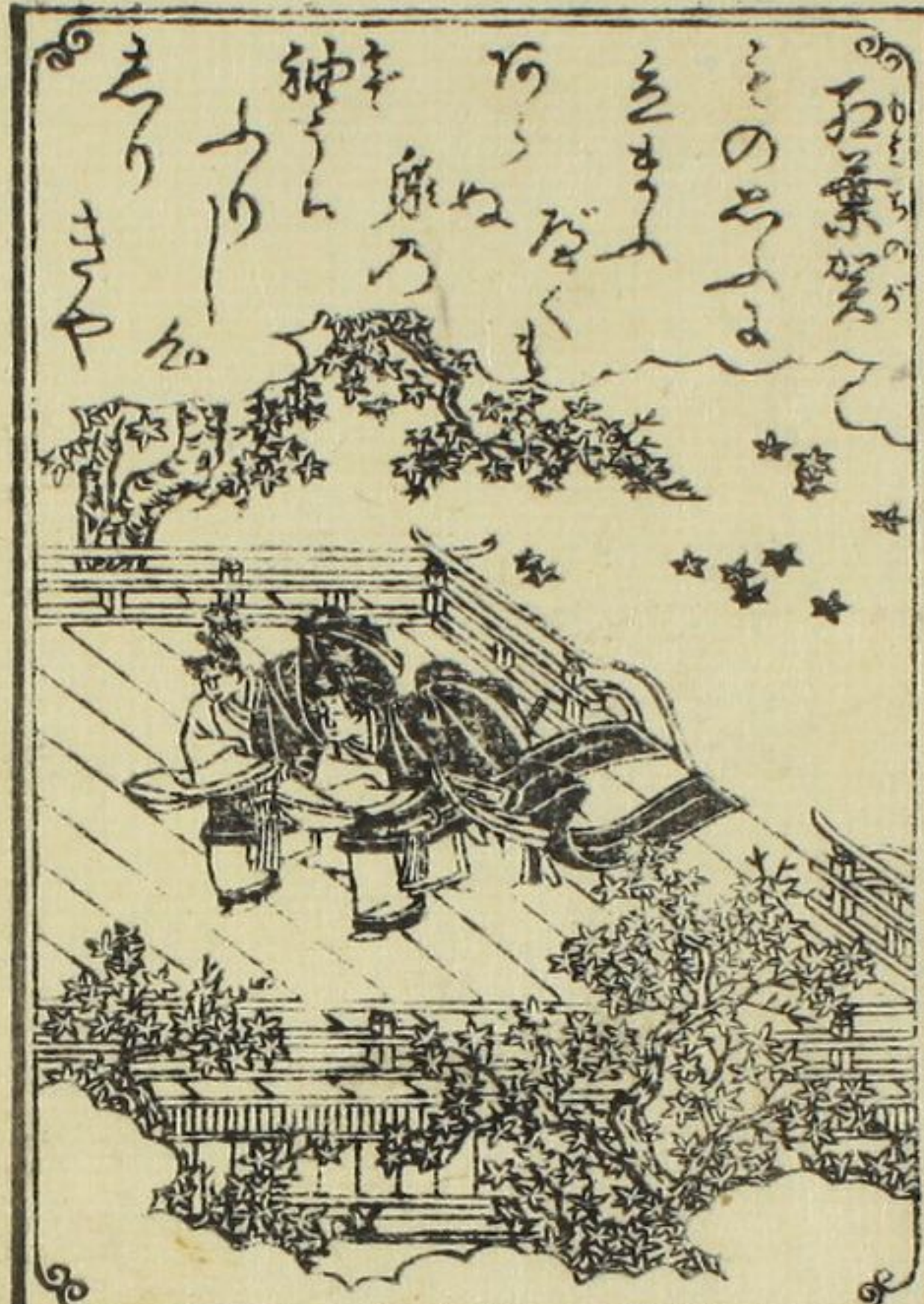
八月
 秋さきね
 まくら
 まくら
 まくら
 まくら
 まくら
 まくら
 まくら



木

源氏物語





お葉あはれ
このあまよ
ままよ
ゆかき
ゆかき
ゆかき
ゆかき

あまの
あまの
あまの
あまの

お葉あはれ
このあまよ
ままよ
ゆかき
ゆかき
ゆかき
ゆかき

あまの
あまの
あまの
あまの

けりあはれ
らひらの
うたれ
あまの
あまの
あまの
あまの

のれの
のれの
のれの
のれの

花影
このあまよ
ままよ
ゆかき
ゆかき
ゆかき
ゆかき

あまの
あまの
あまの
あまの

花影
このあまよ
ままよ
ゆかき
ゆかき
ゆかき
ゆかき

あまの
あまの
あまの
あまの

花影
このあまよ
ままよ
ゆかき
ゆかき
ゆかき
ゆかき

あまの
あまの
あまの
あまの

花影
このあまよ
ままよ
ゆかき
ゆかき
ゆかき
ゆかき

あまの
あまの
あまの
あまの

花影
このあまよ
ままよ
ゆかき
ゆかき
ゆかき
ゆかき

あまの
あまの
あまの
あまの

火の無
 火の無
 火の無
 火の無
 火の無

火の無
 火の無
 火の無
 火の無
 火の無

火の無
 火の無
 火の無
 火の無
 火の無

火の無
 火の無
 火の無
 火の無
 火の無

火の無
 火の無
 火の無
 火の無
 火の無

火の無
 火の無
 火の無
 火の無
 火の無

火の無
 火の無
 火の無
 火の無
 火の無

火の無
 火の無
 火の無
 火の無
 火の無

清幸
よほふ
らんま
ほのれろ
ねご
ふけり
や
おほ
おほ

おほ
おほ
おほ
おほ
おほ
おほ
おほ
おほ

おほ
おほ
おほ
おほ
おほ
おほ
おほ
おほ

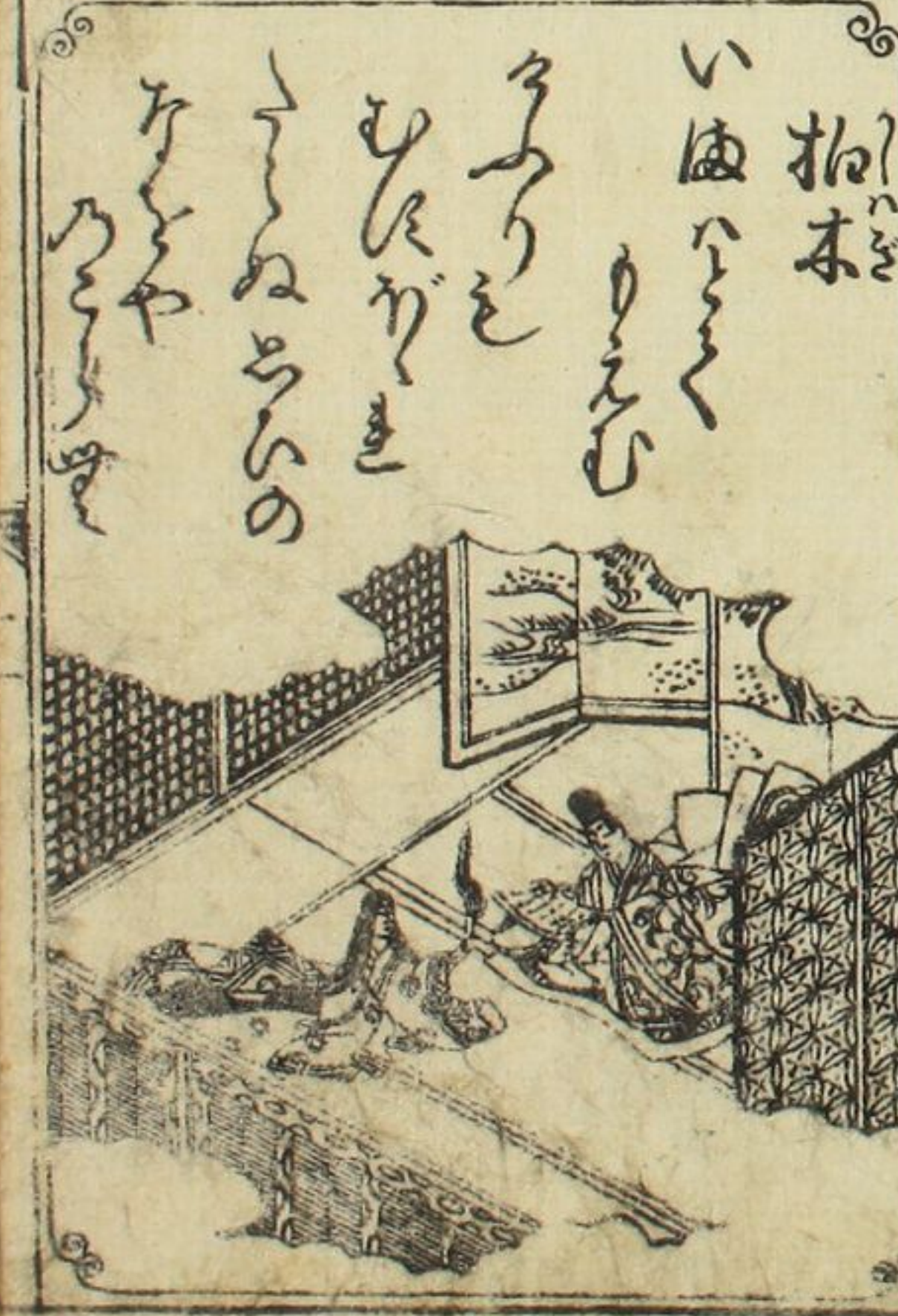
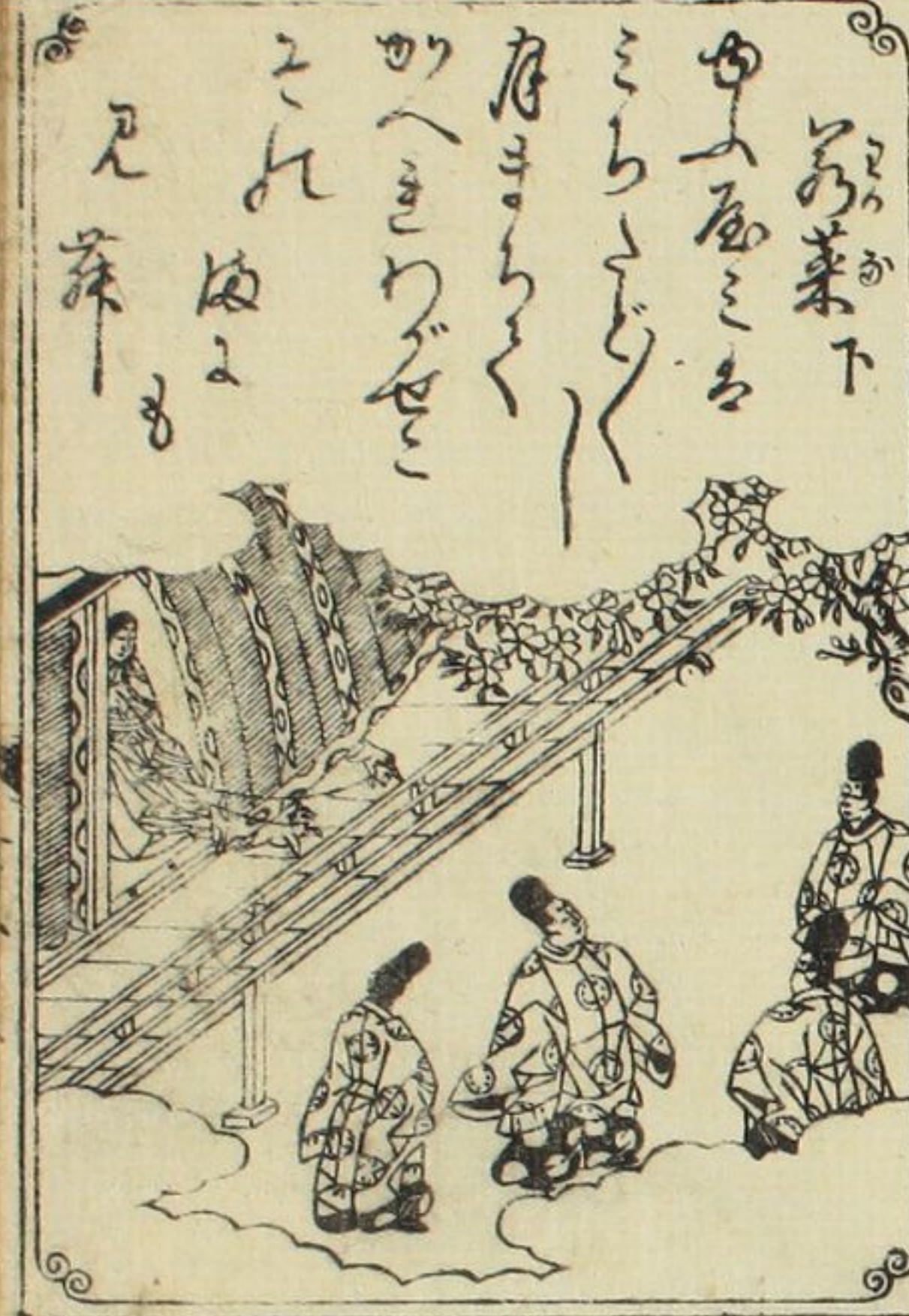
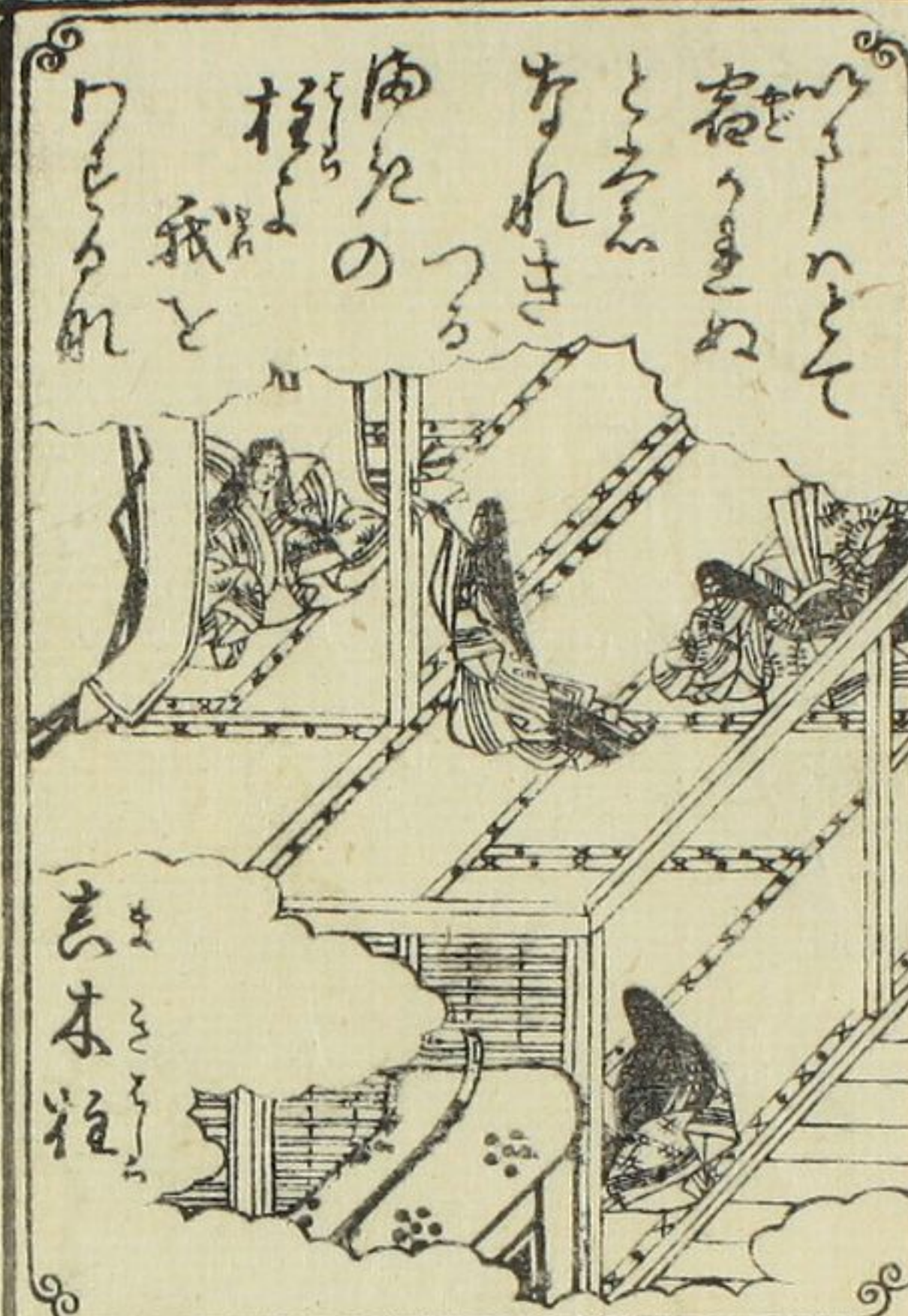
おほ
おほ
おほ
おほ
おほ
おほ
おほ
おほ

おほ
おほ
おほ
おほ
おほ
おほ
おほ
おほ

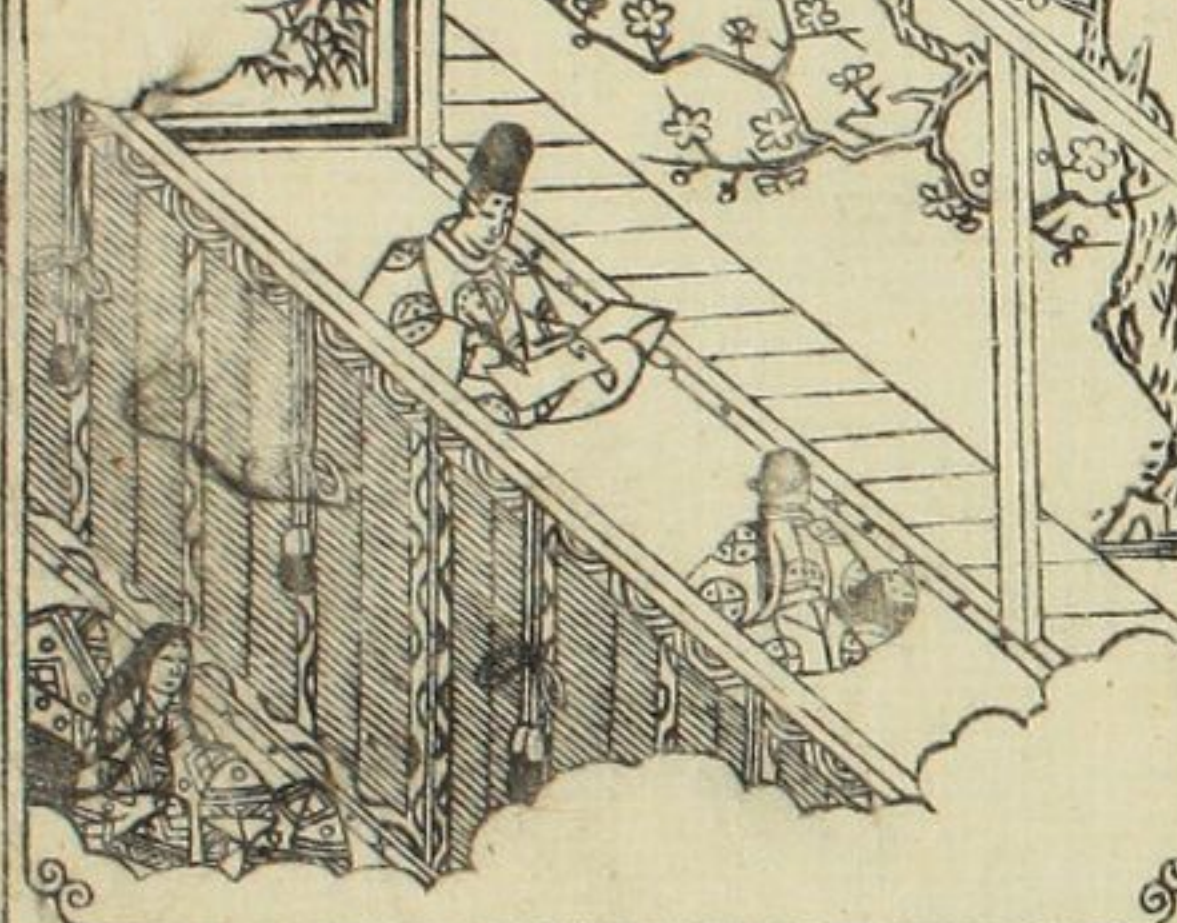
おほ
おほ
おほ
おほ
おほ
おほ
おほ
おほ

おほ
おほ
おほ
おほ
おほ
おほ
おほ
おほ

おほ
おほ
おほ
おほ
おほ
おほ
おほ
おほ



紅梅
ふの
風の
まの
うの
うの
うの
うの
うの
うの



幻
あは
あは
あは
あは
あは
あは
あは
あは
あは



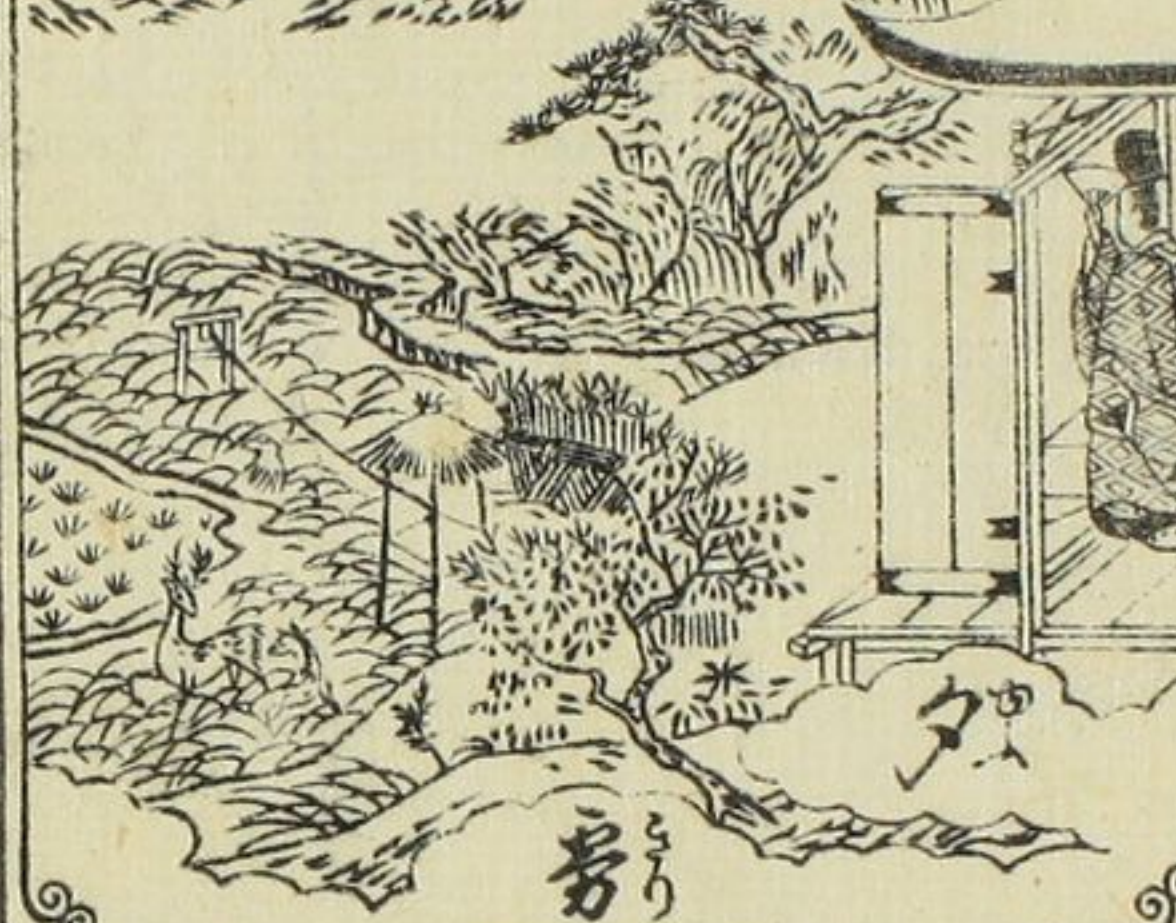
竹
た
け
け
け
け
け
け
け
け



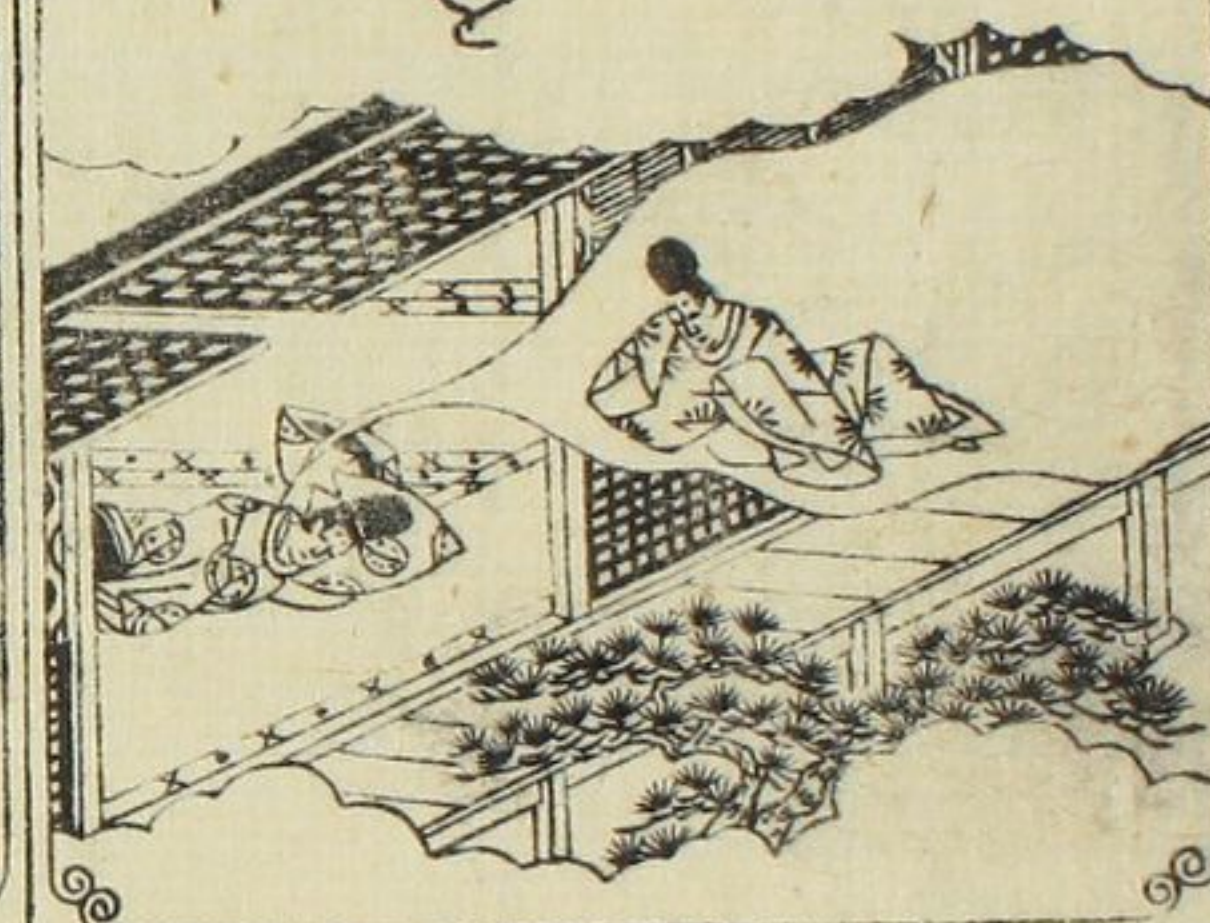
白
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ



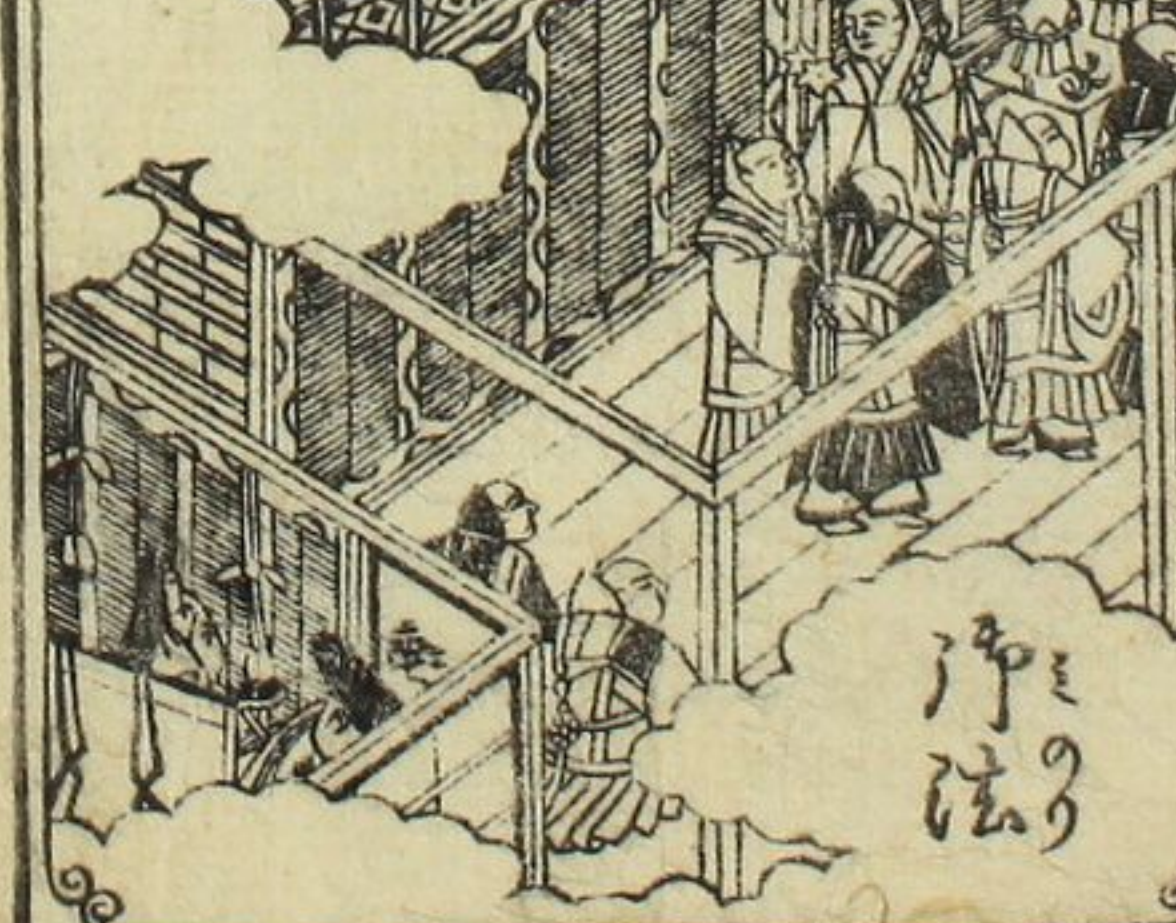
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ



あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ



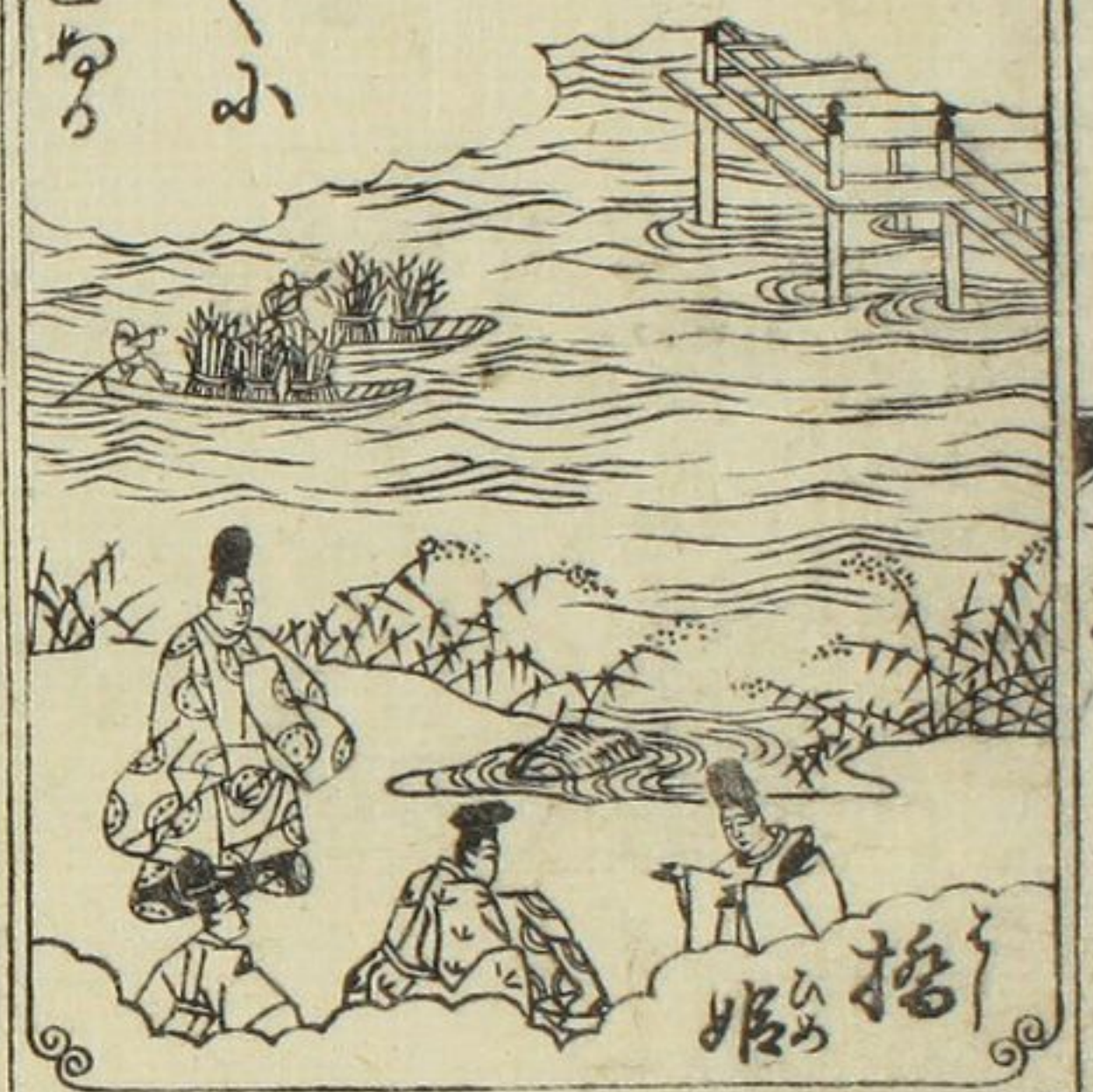
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ



あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ



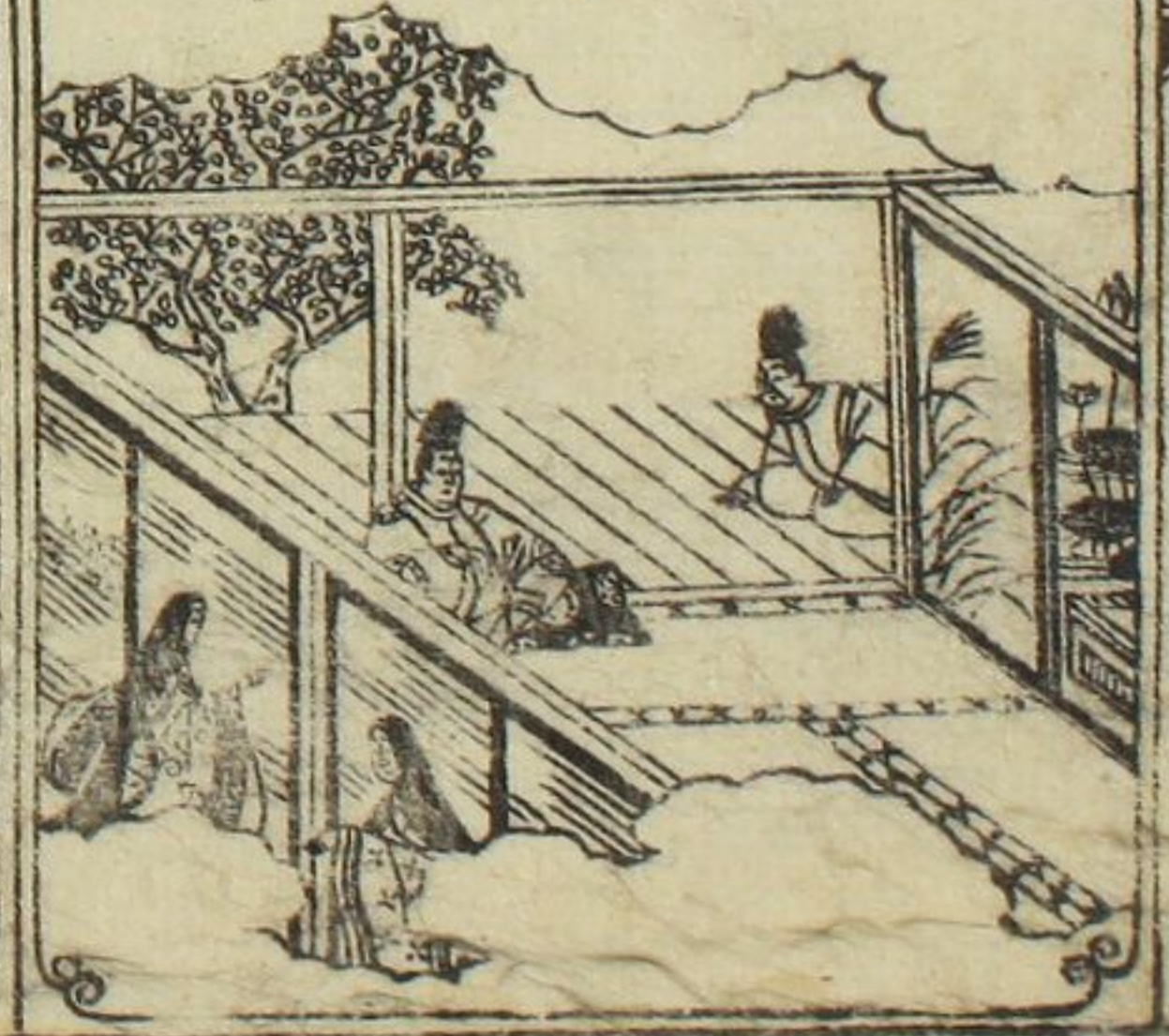
こひ光
かそ乃
くまて
ぬせさ
うかの
志げくふ
神が
ぬまやう



あけ
きたよ
ふうさ
むとび
やの
あろに
ありも
あひまひ



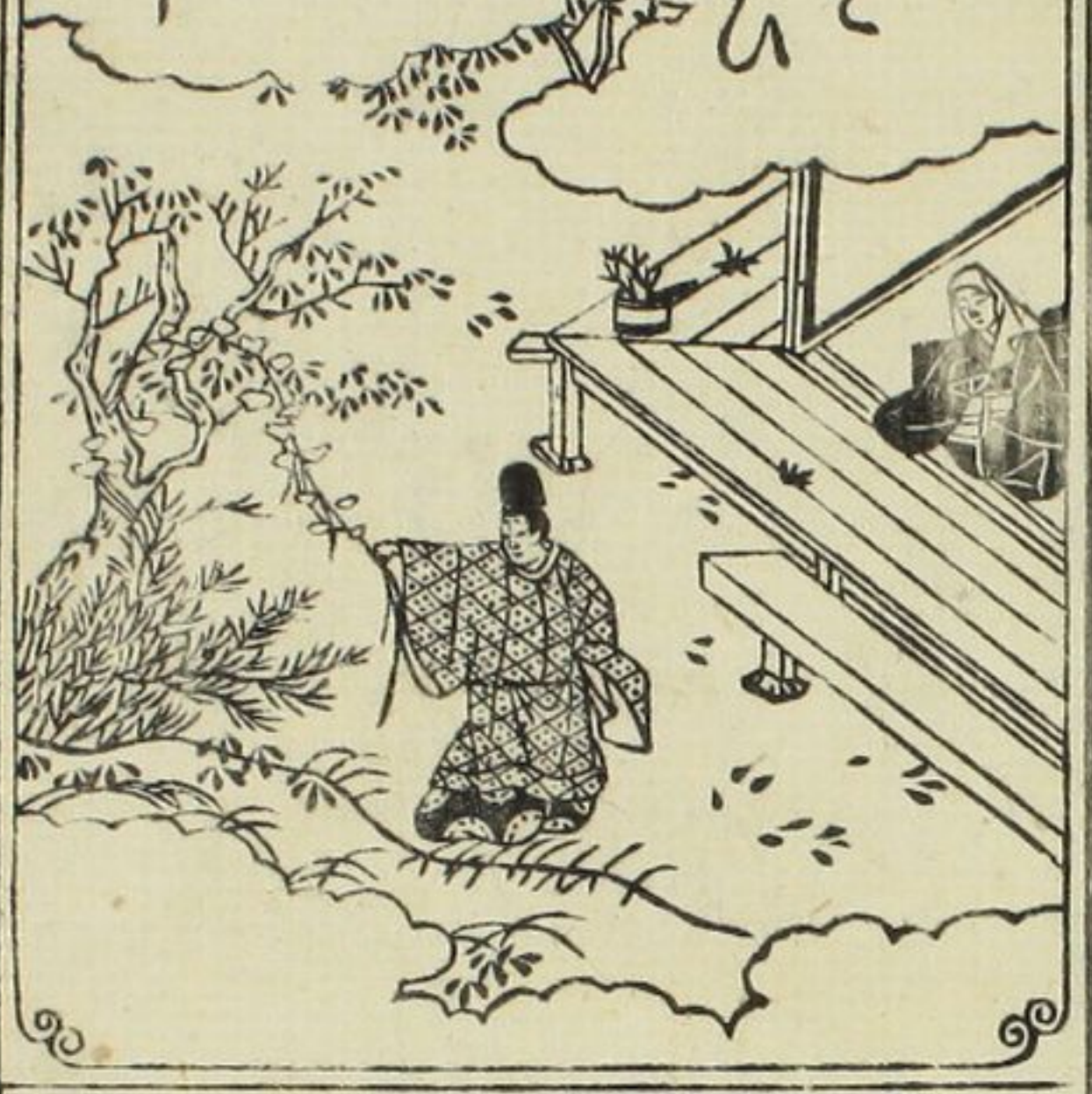
推
うま
まの
あが
むけ
とこと
さう



お
おの
見
つ
さ



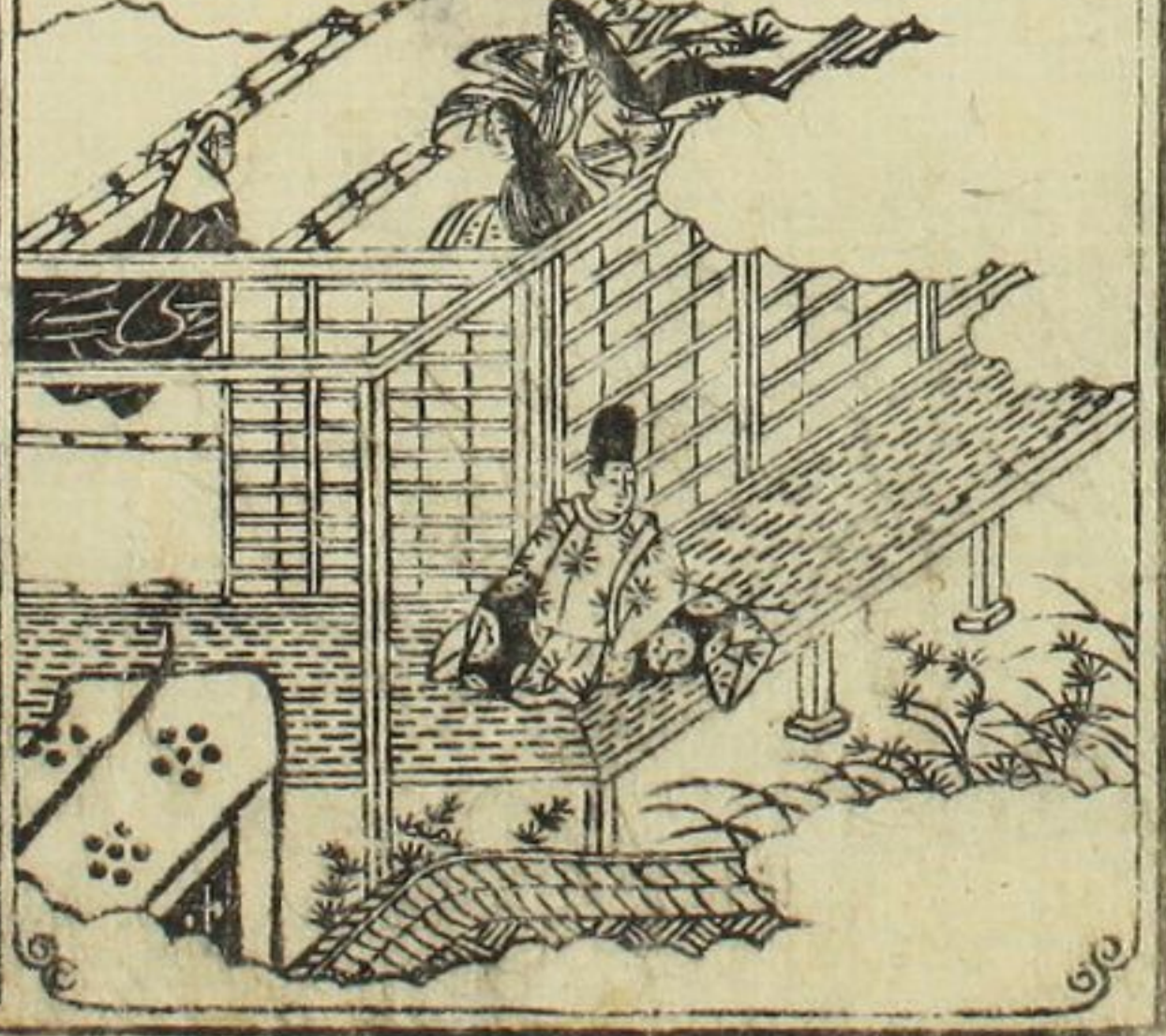
宿本
やう
い
この
ふ
あ



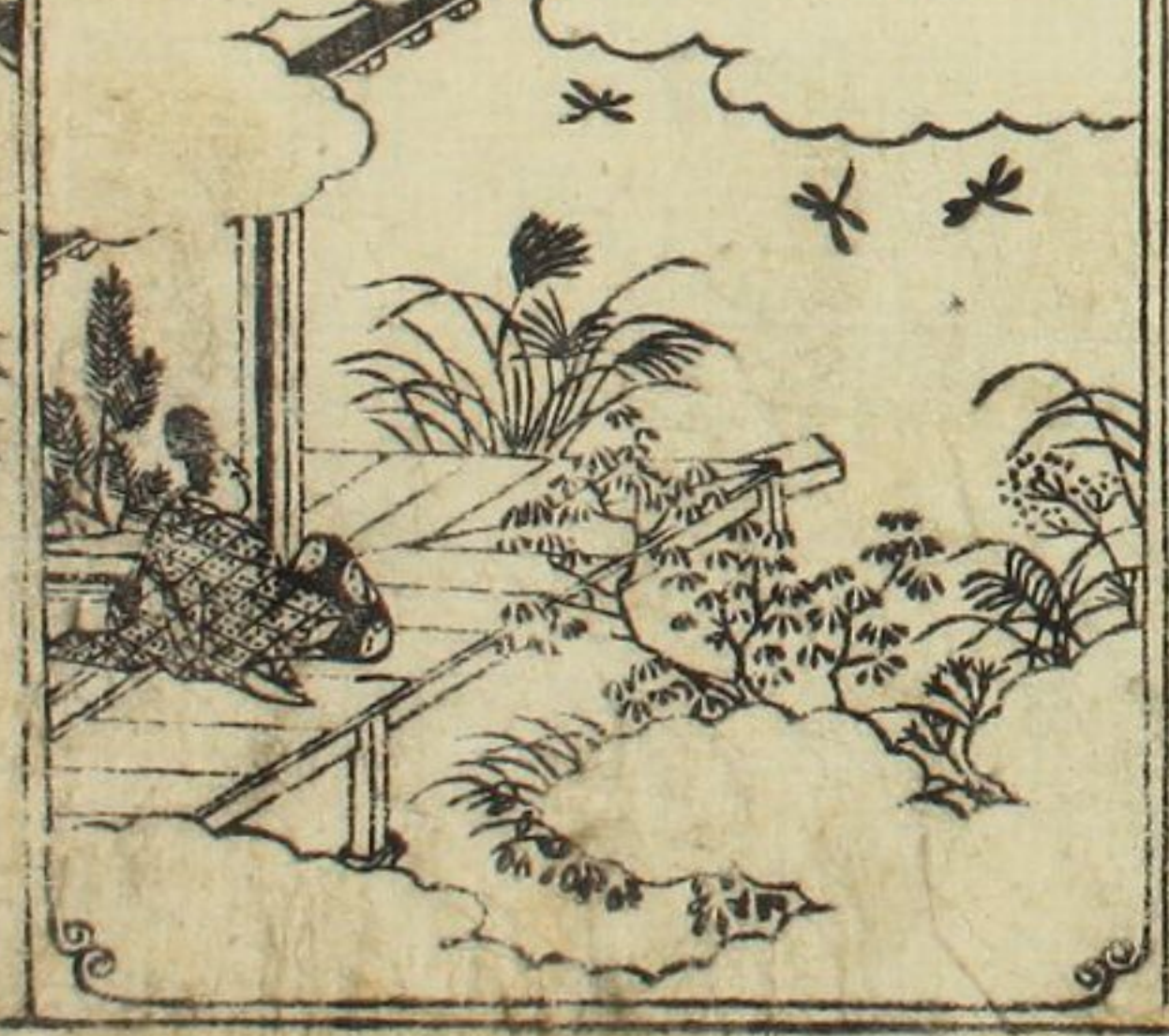
浮舟
ゆ
この
う
う

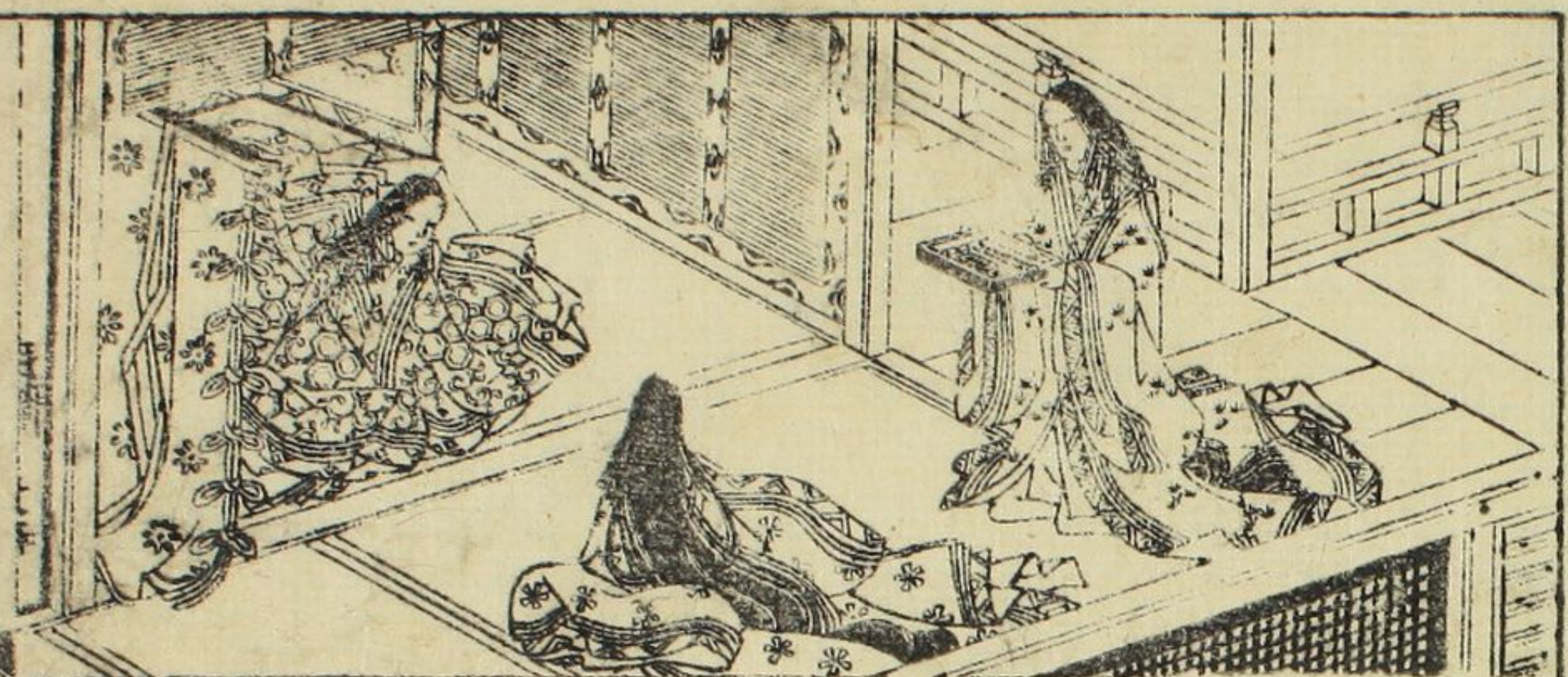


東屋
う
び
あ
あ

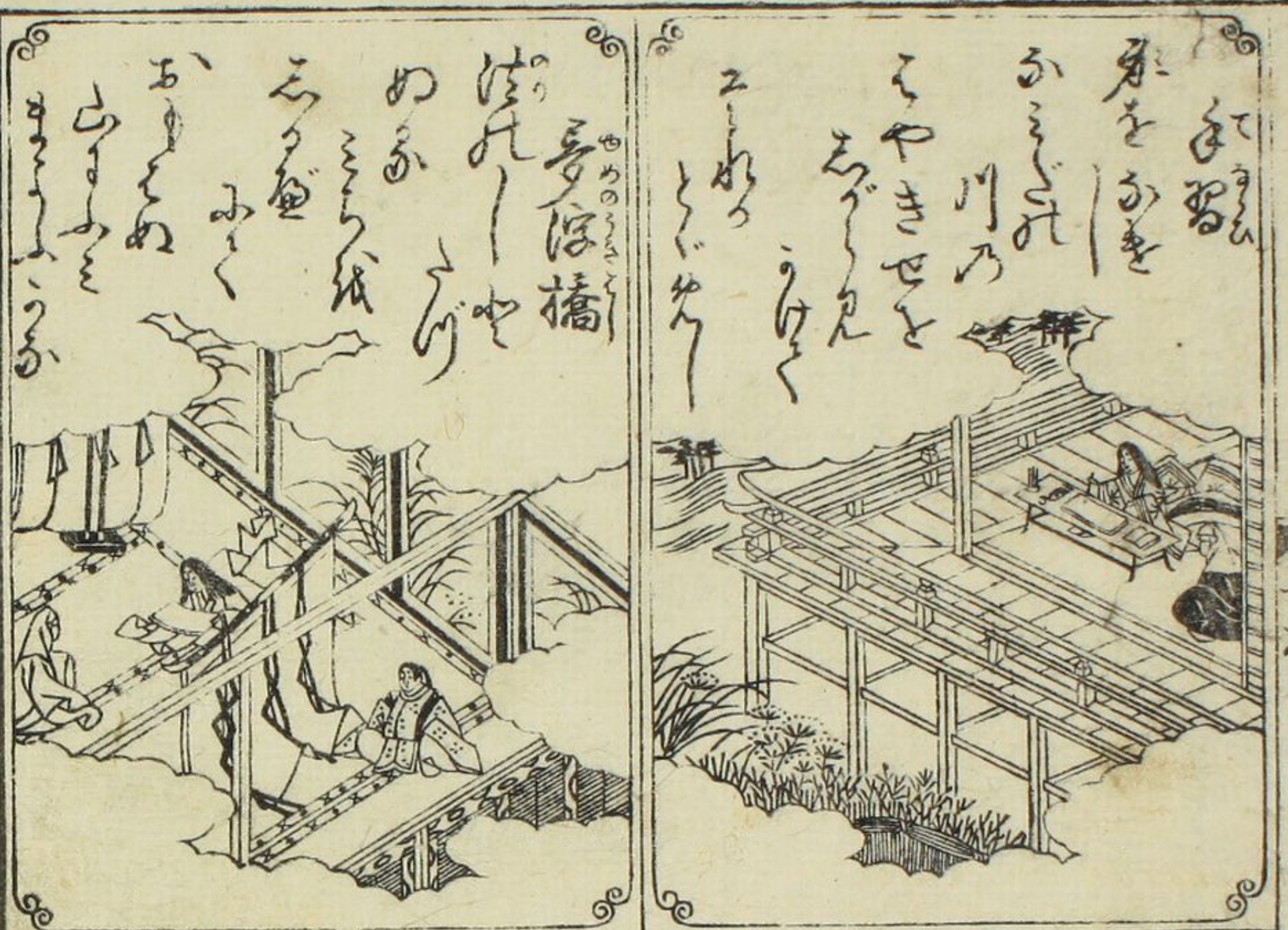


中
あ
あ
あ
あ





女火燗子 めんまごい
 一丈女子の成也 いちじょうむすめ
 他人の歌 たにんのか
 男始 おとこはじめ
 侍のなれん心 ざむらいのなれんこころ



源氏物語の一条院の上東門院への川
 りしき取寄のやゆかこるさせしむる官女
 紫式部に侍つきしむるれと式部石山寺へ
 ありてはむかひのりしむる八月十二
 夜の本御ありたりてかきすむるありさる
 まりしむる先す御ありしむるおまを成法あり
 とせしむるしむるのまきくふふうしむ
 物たりしむるぬますきしむる今ある八月
 十五夜やとりあり式部の祝世者の化身
 かりしむるしむるも光るしむる源氏七歳
 乃法射よりまきしむるしむる何とむる源氏
 とはむるしむるしむるそのはむる藤よりむるむ
 るしむるしむる君のくむる光るむるむるしむる
 くむるしむるしむるむるむる光るむるむる
 とむるしむるしむる源氏六十帖やむるむる
 巻の五十四帖あるむるしむるむるむるむる
 るむるむる



男子よあも親
 乃教ゆるせり
 才金くん父母
 飛巻して遊あそぶ
 育ぬ色心こころの



家よ幼こく必かならず氣き
 流ながれくままく味あじ
 中なか又またく回まわり海うみ
 可たく年としれく難たがい
 空あの男おとこと娘むすめ

それを動かすは...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...

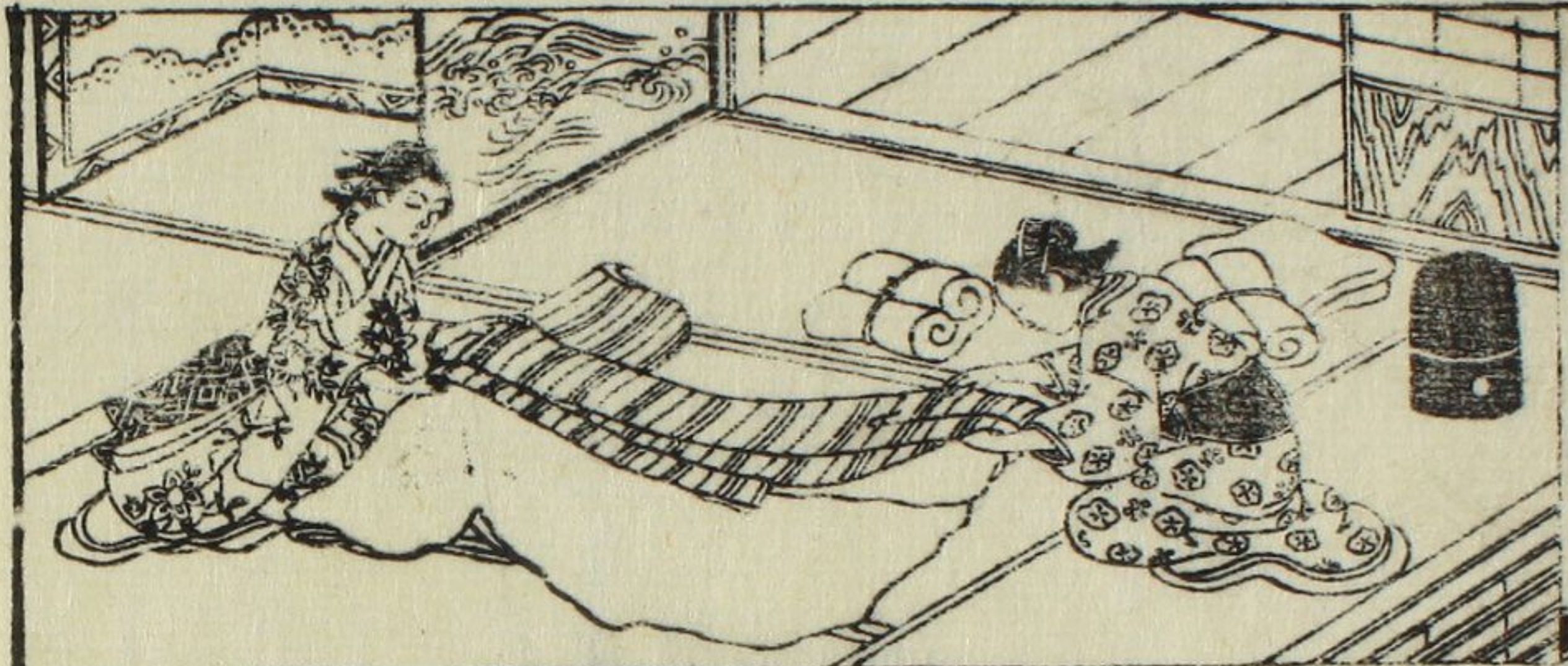


申 ^{まか} ^あ 忍く ^{しん} ^り ^く ^り ^く
 終 ^{つい} ^は げ 追 ^{つい} ^ひ 出 ^い ^す ^終
 恥 ^ち と 曝 ^{はく} ^け 女 ^に ^よ 女 ^に ^女
 母 ^{はは} ^の 家 ^{いへ} ^の 刻 ^{とき} ^を 記 ^し ^す ^べ ^し
 謂 ^{いは} ^ふ ^と して 累 ^つ ^ね ^を 史 ^し ^を 云 ^い ^ふ

さが ^さ ^が ^ら ^く ^は 口 ^{くち} ^を 籠 ^{かご} ^に 入 ^い ^れ ^る 人 ^{ひと} ^は
 先 ^ま ^に 立 ^た ^た ^い ^た 人 ^{ひと} と 垢 ^{あか} ^を 嫌 ^{きら} ^む ^も
 家 ^{いへ} ^の 身 ^み は 袴 ^{はかま} ^を 穿 ^き ^る 人 ^{ひと} を
 侍 ^{さむらい} ^の 笑 ^{わら} ^を 遠 ^{とほ} ^く 人 ^{ひと} は 侍 ^{さむらい} ^を
 息 ^{いき} ^を 吹 ^ふ ^か ^ら ^は ^る ^か ^ら ^い ^れ ^る 女 ^に ^の 乃 ^{なり}



わん一生を
 守りて心あり
 惜ぶ事よわ
 女は父母乃命
 媒物とよね



ふくまふ
 時の良家とい
 法と知りて
 と龍ありと
 親見あり



交らぬ親すと小
 学ふとんさあ誰令
 後と尖ふも心を
 金石をんみく子雲
 して美家とちるふー

維新のころいほ色を
 りよととて種を社業
 の製しよりあつたあ
 せしもの大異と
 又九針をほらぬと
 又九針のしらに針り
 てゆらんとかをわが
 大已貴神 大陶紙女
 浴衣信非にむいふ時
 庭を造るゆり針物と
 縁て明日糸乃に
 より越前浄山をな
 三徳ふまふとわれ
 針代すてに針縫麻
 ありさるるを

一婦人との家の家
 をわが家とするが
 産むよの嫁とゆり
 水は我家ーのー
 るとの御中へあり



娘丈乃家質持
 かやも夫と怒へん
 してらるわきに
 之れ家れ貧へ家
 仕合も函故あは
 仕合も函故あは

衣帛とのぶらうんぬの
 野多しといひかろは
 ひー般の付まをり
 かりとあつく悪王をり
 きれはけのと刑罰の具
 をけらうんまく先大に
 野多のたぬいさうの
 物とほくりつとあ者
 これととていむまばも
 すれつらやけされをを
 かんくこ此姐こもまに
 毛さるてこしひたれ
 そののこたりけうつりの
 毛そのまも色こつなり
 毛れもかまり衣書
 毛らうけらにの
 毛らうけらにの
 毛らうけらにの

おもひ一度持て
 其家と出さぬと女
 の乃とすうこと古
 聖人乃割るも若
 かの乃平そ母を家



機 織 布 後 膝 升 籠 炬
 綜 維 撻 臥 機
 核 罽 鉈 績 績 績
 絨 罽 鉈 績 績 績
 絡 紡 車 紡 車 紡 車
 績 績 績 績 績 績
 撥 撥 撥 撥 撥 撥
 砧 砧 砧 砧 砧 砧
 尺 尺 尺 尺 尺 尺
 水 水 水 水 水 水
 削 削 削 削 削 削
 盤 盤 盤 盤 盤 盤
 烟 烟 烟 烟 烟 烟
 行 行 行 行 行 行
 盆 盆 盆 盆 盆 盆
 盃 盃 盃 盃 盃 盃
 酒 酒 酒 酒 酒 酒
 太常用の字類

とも 夫乃 家より
 ての 忠 粹と こと 親
 まりも 重しと 厚く
 せしと 敬ひ 孝の 心
 ありと 親の 心

女子の 道は 多し
 一人の 家より あり
 父母の 忠を 孝
 と 理を あり

本條のこころのちりや
 醫代りうらぶれり
 十八年いげとわかす
 のこころ人を行願ふ
 扇人思く寛命の人の
 べしうらりそひりつ
 中に室のりこころ
 一むそのら中
 その終りせくあり
 の中に終りせくあり
 移りたりこころ
 布にら終りせくあり
 かり本條今ん終り
 海丹波に終りせくあり
 かりのり終りせくあり
 即なりと



勤へと業と急
 と願へと業と急
 むれ勤夕れん
 すりて勤夕れん
 業と急
 勤へと業と急

勤へと業と急
 今れと業と急
 へと業と急
 に同くとも業と急
 勤へと業と急

らぬのらぬあいらり思
 舞し幡車と申すは
 幡車はのこのこと幡の
 をいふ幡車はあつて
 軽し幡車いとをいふ
 うつ幡のそのあつて
 どのことかおあはる
 重と申すは加賀奥列
 入りつるものまをれ
 こやあにらるるこや
 法練子と申すは
 重と申すは入りつる
 重のよきおのあつて
 りと流のいふお
 いふおのいふお
 目尻色後鴻鳥を
 活これ西陣より
 出る

と悔之 飛入も 怒
 恨 怒り 好色 孝行
 おつて 謀と
 つゆ 忘れ 復は 好む
 申好 好む 好む
 のこ



一婦人 別れ 主と
 夫と 主人と 思ふ
 敬ひ 悔く 事
 悔く 先 悔ふ 今
 悔めて 婦人の 乃の



毎礼^{れい}なり^{なり}夫^{とつと}が^が後^ご
 立^た然^らと^と此^{こゝ}の^の思^{おも}ひ^ひ
 眼^{まなこ}海^{うみ}へ^へ想^{おも}ひ^ひ持^もち^ち
 その心^{こゝろ}を^を送^こへ^へる^る
 女^{をんな}の^の夫^{とつと}を^を思^{おも}ひ^ひて



一^{ひと}葉^はも^も不^ふま^まり^り
 同^{どう}く^くと^と乃^の下^げ知^ちに^に
 清^{しみ}く^くへ^へし^し夫^{とつと}同^{どう}く^くと^と乃^の下^げ知^ちに^に
 正^{ただ}しく^くと^と乃^の下^げ知^ちに^に
 返^{かへ}り^りて^て乃^の下^げ知^ちに^に
 返^{かへ}り^りて^て乃^の下^げ知^ちに^に

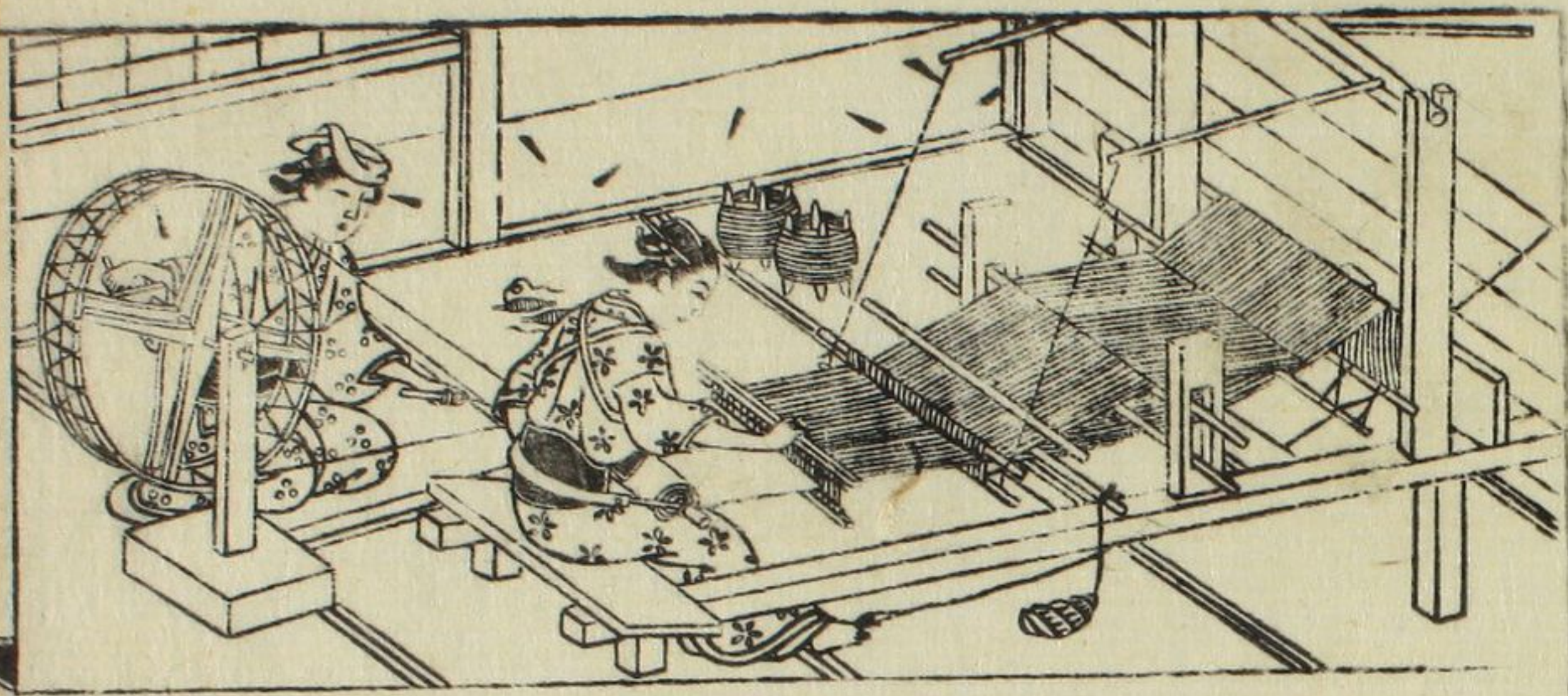
婦人の白綾とついで被と
 綴帽みくはあしうさ
 糊こきんあり乃をさひ先
 のりこやのきぬのり
 のりのりかむね仙乃根
 とまりひくべい
 はくふ一際のお入はぬ中
 の一層手なり三時
 とつはらのゆをいぬ乃
 過みとのし津去家智
 流なりふきあはれ
 産とるりくい
 ころふおねと二百石あり
 けさの産つくとふ
 とは式は長年補帷子
 をうらむらなり今
 びらり帽子あはれ
 あり



夫と人ぬきくも夫
 に送ひくともか
 と文屋
 一見公女公女乃
 見ず平れんむ
 夫乃親親よ後と

夫乃親親よ後と
 憎れんむ男姑の
 心へ寄るる
 為小女を更らむ
 膝へ坐すれん
 乃

核のこトめり美帝は
 御余とよ人うそ麻糸
 と核はうけくあうらうそ
 核れ代にぬ糸を織るあり
 うらなりゆとより美帝の
 后西渡氏とマヤし結く
 髪し糸とより前とより
 ら織匠の功とより
 られん美帝はゆりあり
 べーりの御美天照太神
 のいりくと和日姫のそ
 核より隠しあり又
 核代のそにも核れとあり
 心核帯乃たのゆえあり
 久しいまらありあり
 あひく織もの多きれ
 核のりきうと下核の
 をうらあり



心よし婦人又煙を
 親と核ぬま
 孫又まん見披
 の厚くうやまふ家
 昆持と同じくす
あつ あつ あつ あつ あつ

一癖娘れ心持く
 花すべり男探れ
 なしと凍へし娘
 忍べん娘あは
 そのけしと
 こそ年と云はれと

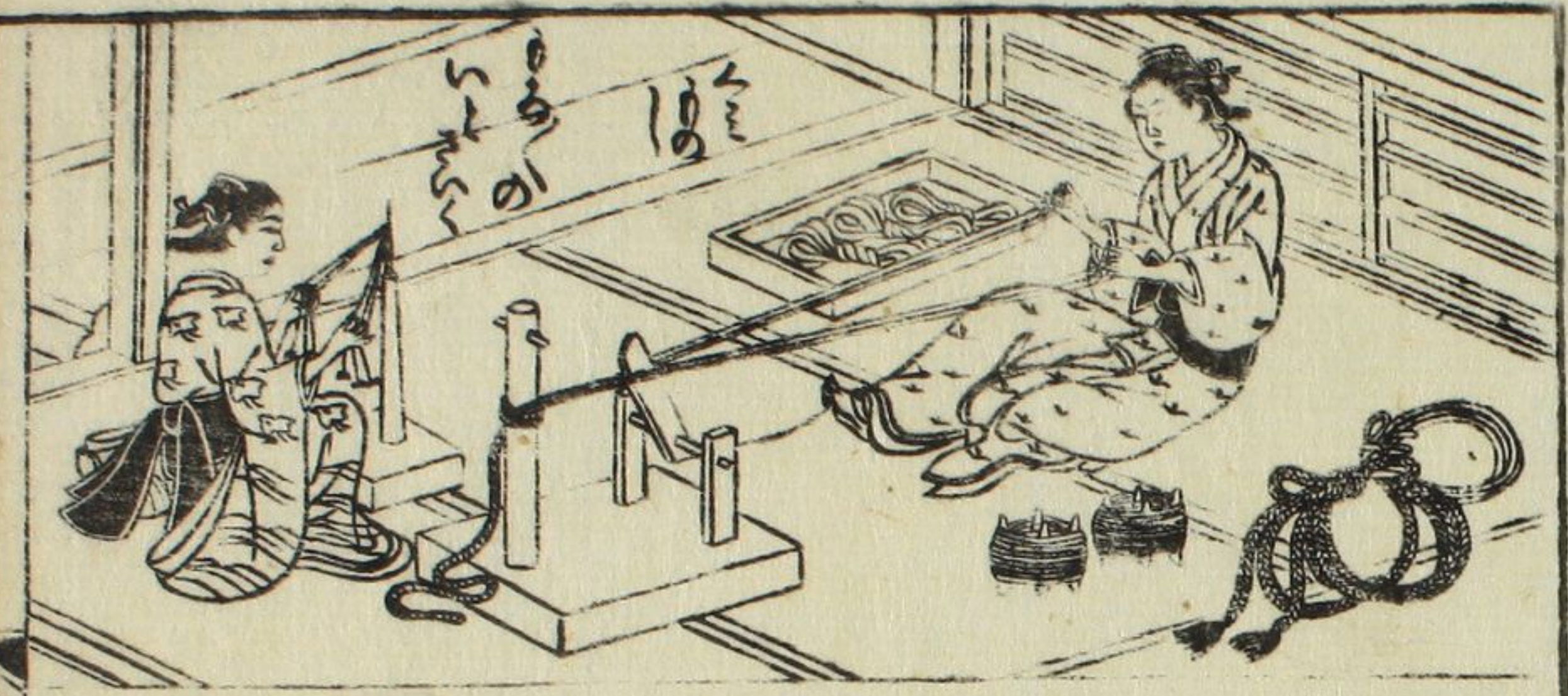


会珠屋の糸太板にまゝ
 つのり紙本をまはしては
 或の善提樹の言あるひる
 糸太板のありの婦人志
 りのり八箇のうらまは
 豆種の顆々水樹をりし
 これをねぞ染乃粒珠を
 りよりひ伏の用るふは
 顆にま角ありこれより
 乃つとのりをねる百萬
 遍の粒珠とつりありり
 会珠屋の糸太板にまゝ
 やひちの流る色どと又
 け百八のぬい七十二候り
 十二月廿二日とととと
 てはくまるとりふも古今
 糸太板のり太のりゆりの
 書にあり

忍中及治とそろかきして
 却る吏とつとに珠うしまき
 見浪なみぬ物ものなり
 多吏とつと不義ふぎ我わがる有あり
 日ひが美いみと和わを鈴すずと

雅や少すて諫いさむへ一い珠しゆと
 軀こゝろより多いふ熱あつくむ先まづ誓ちかむ
 心こゝろの後のちよ吏とつとの心こゝろわ
 方かた時とき復ふた珠しゆ屋やみ
 氣き色いろと暮あくし

凡縁とのりく、法品成
 つらふあれを紐をくつ
 徑糸の結まなく、
 白くまの糸とお交
 こりく、心も、
 皮は、礫、研、
 松皮、と、
 樹の皮を、
 高、
 又、
 さら、
 ろ、
 の、



一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

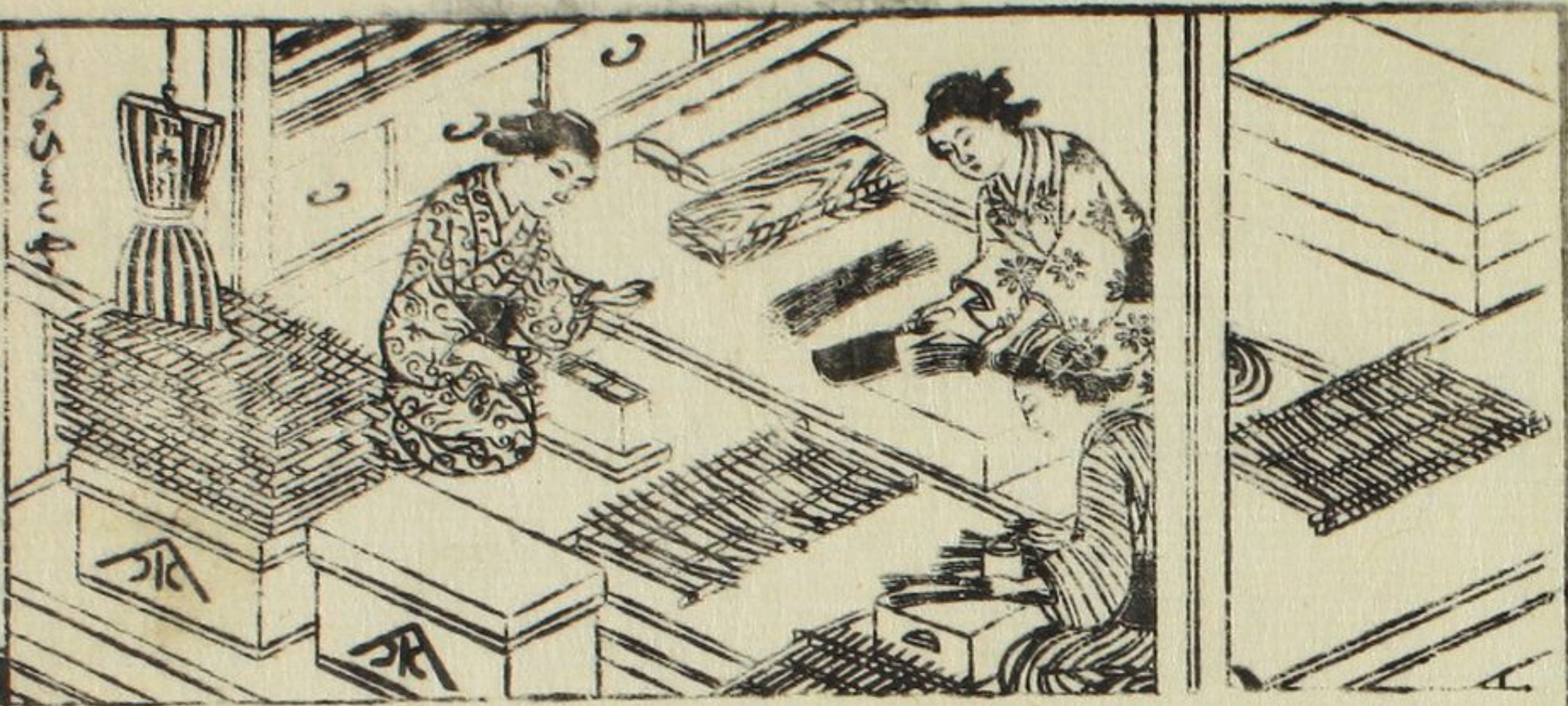
人の、
 一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、



元来よりつとめ絹糸と
 つとめあつち織り糸とを
 のらにのぞひまにそへ
 日一りにして後その糸を
 解いたれりよふれ紋足
 やりそのの松麿の皮刺
 あつちのししあれと振
 て鹿子目織り糸とを
 この紋とてはくまを
 懸麻子といふ所くり
 のらと村々のことりされ
 婦人の業ふしと麻子
 結いしつとめあつち糸
 織り糸とをそのあつち
 深き糸とてはくまを
 あれと
 つとめ
 のら

肉とて海に
 一女のあつち
 一とて子と聖
 得とて獲たべ
 早く起るを速く

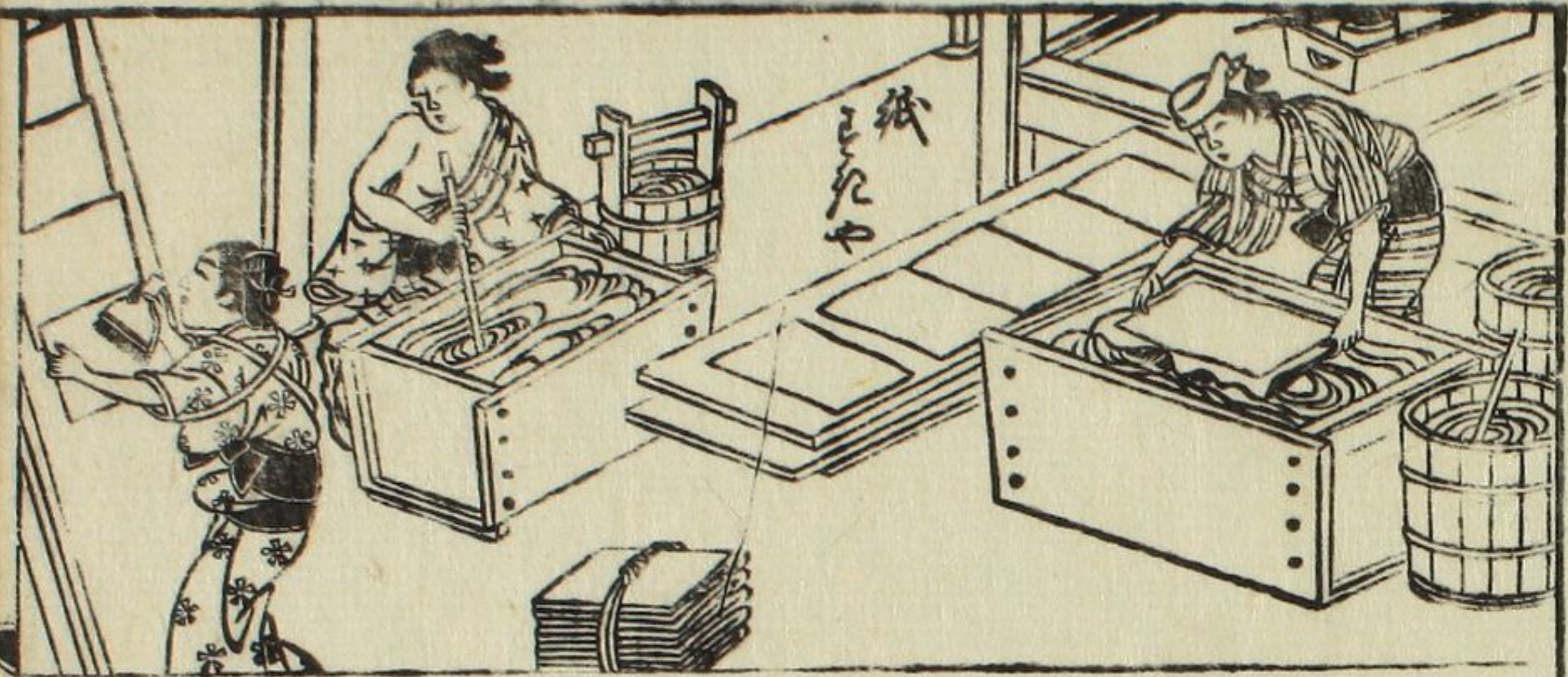
寝衣のいねと
 内代糸
 と用ひ織り糸
 織り糸
 織り糸



水引の婦人の贅にうし
 られとつらやうに杖を又
 奉書紙の長短にびびり
 こゝろさうりなかりてこれ
 とひのり長長一尺ばかり
 まつろく米浦のたひは
 どりぬし帛をぬくそ
 を後日にかきて後
 半分に腫脹とやらあると
 未白のあしひのしよ
 をかきゆき世に金く
 幣金並汁をかりて後
 びびり細い糸を十
 徳にひいて把とに
 又もみ紙をいふとりのく
 ひゆるぎの平紙
 といふひのり

赤い茶酒が
 多く春へは
 牙垢技小秋津
 王が乃深
 事と見聴へ

文孝かと都
 人か心おけあつ
 まれおまへ四十歳
 ちり内へ解り
 仍へる



紙之漉業の端をたきき
 美蜀葵の汁をおかしと
 赤い色田となしく作り
 漉澤をこりてあつた紙
 へこの水を竹葉とつこ
 こねとすそひく板にりて
 ぬぐとてほろこをこらし
 せれくふるん九串の
 いぼのふまの加質の奉書
 紙の鳥子を才一とに
 松原紙の漉紙の海串
 腕若の楯中楯紙はる小
 そかゆふある中ゆすり
 さぬく知るかりおや
 言紙玉鹽紙漉紙す
 実厚やう為やう尺長
 六色紙
 ちりくともろくがし

一人の業と成ての
 時ハ禱にともと
 神仏のちまよふ
 へし業乃の心
 それ家とく保
 一人の業と成ての
 時ハ禱にともと
 神仏のちまよふ
 へし業乃の心
 それ家とく保

一巫覡がごの
 道ひく神佛と
 法一近付振お
 新ふへん只人
 の勤とくす
 一巫覡がごの
 道ひく神佛と
 法一近付振お
 新ふへん只人
 の勤とくす

素麺を諸国の名物の
ありとせしむる俗の再掲と
博多二條にありふること
これに地味趣き
ゆらゆらにゆきまわらる
湯餅の日本のもうめん
温物と不格と何れも
うすうすをうすうす
あつた羅敷のけしきを
和してうすうすのそと
まじりてうすうす
またゆめをそと切り呉
の寒さへ入るふありこれを
煮てうすうすをそれゆ
切麦といふうすうすと細
きうすうすといふめんを
おこしうすうすをうす
ゆめなり



熱く敷場かんて
家と破るいふ事
儉めして費と化
魚と衣被飲
合ふと身かん

公派一とさかん
用く奢るは
一とあまの時の中かん
親親友遊下都
鳥の羊ふれ蜀ふ



素より一糸一毫も聖人
 ほどの心くわりの心と立明と
 して桂麻を依あらん人
 用らざるの麻の尺巾の
 一尺二寸今の一尺の要中
 の用ると麻の心能を尺
 のりの心と麻の心と長
 一の心と朝鮮麻の心
 うろた麻の心骨の心
 石印の心とん麻の心
 麻をにんす所あり
 あれも麻をえん根中
 と城殿駒舟氏心と
 御新量れ麻の心なり
 某阿弥抄と
 いふなり

一尺二寸今の一尺の要中
 の用ると麻の心能を尺
 のりの心と麻の心と長
 一の心と朝鮮麻の心
 うろた麻の心骨の心
 石印の心とん麻の心
 麻をにんす所あり
 あれも麻をえん根中
 と城殿駒舟氏心と
 御新量れ麻の心なり
 某阿弥抄と
 いふなり

打ち解く物理
 正行へん男女の
 強と固すべし
 用有と
 男に文を
 毎に

指のひ針の神代より
 こけり針女より神代女
 神代衣を縫ひたるを
 縫ひたり又を渡さるの婦
 百軒とて針所をり
 せ給ふされは徳園より
 ひらりと雲うらうら
 ようく婦が小治の衣を
 りとて針を穿たるは神の
 衣大若もくはらうらま
 一あねと池の川の針
 衣とつりきこく三層乃
 阿茶河の衣縫ひたるを
 いはると針とてして
 そやしく針とにそや
 を着抜くして徳園へ
 うらその針ふ
 あくめを



身と衣衣と乃
 採どく人御ふたふ
 一借り清
 とあ一人の目ふ
 立や燈をふたふ
 一

只いし力よ一
 一と用由へ
 一家御代親
 みにねし
 の親親と次

賤の女乃もむ部のを
 もふまゝ一上粟田山白
 川の山北中三乳白石
 村乃人農作のいとぬり
 石工をあり用にまゝひ
 これと石とり用ゆをま
 里れ女もるゝいりせ
 りてうらこのあう女の
 もと魚くりにほくは
 のとあふわと勢さう牛
 追あどのとさうもあ
 うらにむものた女乃さ
 りてさうあまをまをれ
 かり古風の句に
 されごらや

白川石と
 小糸花

黒本のこの小糸花大
 系結るれこ人かま
 本と代てはら室と中
 にほくり官方に成る本を
 つと生糸と焼くま
 めとうにあふろまとい
 それと焼くろあとのわ
 そりに塩あもをま
 あう人これまはらやせの
 ありあれやうその黒本
 はひの村の婦うらふ
 いひま半るにゆせ
 まふまゝいりうらり
 まんもまはらうこれ
 さのまじれたらねをかり
 古風の句に
 大糸の糸りらにや
 小糸花

す魚くは心月
 句おごみと出ん
 乃方と勤く次に
 家親のあつと
 せべーまの殊
 乃方と勤く次に
 家親のあつと
 せべーまの殊

何あへも
 魚くは心月
 句おごみと出ん
 乃方と勤く次に
 家親のあつと
 せべーまの殊



法と継由へしわ
 親もも嬢と大
 切に志ひ孝行を
 為へし嬢して後
 親の家より由く



半も希なるへ
 増く化の家より大
 形と使と事へく
 有間と事へく又
 家親の事へく紙

定活葉の名物と云ふ義
満將軍之内に於て
極めたるそのは義徳云
あらふ貴しきものであれど
避ひく極くあつて又上持
と云はく又別義持と云
ませ上持筆順美作蔵ら
の人丹波よりけし
うつりて富葉ゆんぎら
乃らら一家の茶師公儀
れ清室をかこめて飲ば
ぬ入齋と云ふ乃茶一袋二袋
に十一家のつれづれにつま
ておひとりそのあつて
茶はあつたりいばら
あらはつたりより
ゆららと云ふに女のおえ
らうすりしるり田舎

修入やろり襖やめと云ふ

人

一下しも初はつ胎あま多まく

了よとと可よ入ら事じ

月づ辛しん勞らうとと思しんく

ひとの園えんれありら
おののいしめと才
してさうらふゆと
あつたりよまづは
ゆいあひぐくま
遠やうれものとのま
のらりらとらうか
うけくありら
これ女のあらう
うこれ茶の若く
このりてとら
ささむとく
しうばふれ
を種し痰熱と
冒気やん
あつたり
ゆる頭痛を
ゆる

勤つとむと女にの作法しよふ

ななら男おとこ始はつ乃の為ために

衣ぬいと進しん食じきと調てうへ

丈さつしし仕しと衣きぬと

冬ふゆ席しきと掃はら子こと



三月 洗と洗 常ふ
 家此内 了 瘼
 根小 卯へ 出へ 尻
 一 下女 子 了 了
 心 洗 月 由 身 了



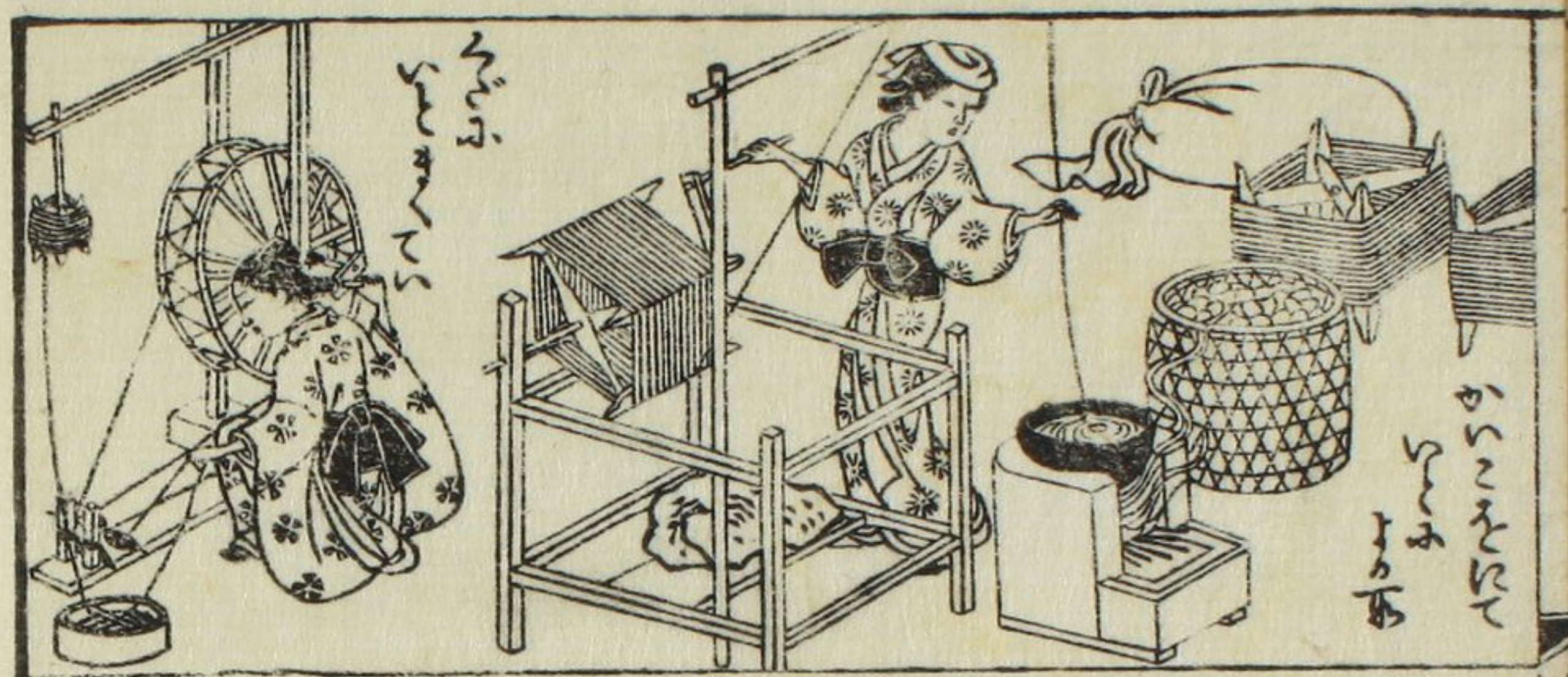
云 甲 根 友 了 尻 下
 福 方 留 一 息 了 了
 留 其 心 了 了 了 了
 物 了 了 了 了 了 了
 乃 了 了 了 了 了 了

馬明善障
 の後ありとていづる美帝は后
 殿凌氏といひゆありて
 發連と冬武乃ゆりひて
 ありてわらふふさして生
 すりてあらしておとこて
 て發成刻てらんをそて
 あらんこまのけりてを
 ひしていづるまはまて
 發成の幸若といふは
 傳につらま
 昨日に城郭歸来波満中
 遍身纏纏者不足春發人
 いづる城郭のまはまて
 ていづるまはまて
 いづるまはまて
 いづるまはまて
 いづるまはまて
 いづるまはまて



かゝ家心よ念ぬ
 事わきと根
 憐れきうも
 却る君れふと
 出へし婦人

智恵なくして
 と伝ふては
 出来あしえ末
 史の家いれ地人
 せんむねと
 報と



思ひ電と捨る事
 毎梅と下女の
 祠と伝へ大切なる
 持持乃親と為る
 事無くは下女

人のちぢぢ中
 先潮汐とまて砂
 中たのちよりちぢぢ
 といふのこれにあり
 たまはく捨るのうら
 しくつらうとほく
 しくはくしとまて
 ちぢぢはくしとまて
 あたはくしとまて
 あつたのちぢぢのちぢぢ
 しくはくしとまて
 しくはくしとまて
 しくはくしとまて

猪とく多とく
 思ふ者ありま
 進出とく
 思ふ者ありま
 思ふ者ありま
 思ふ者ありま

女
 八十五

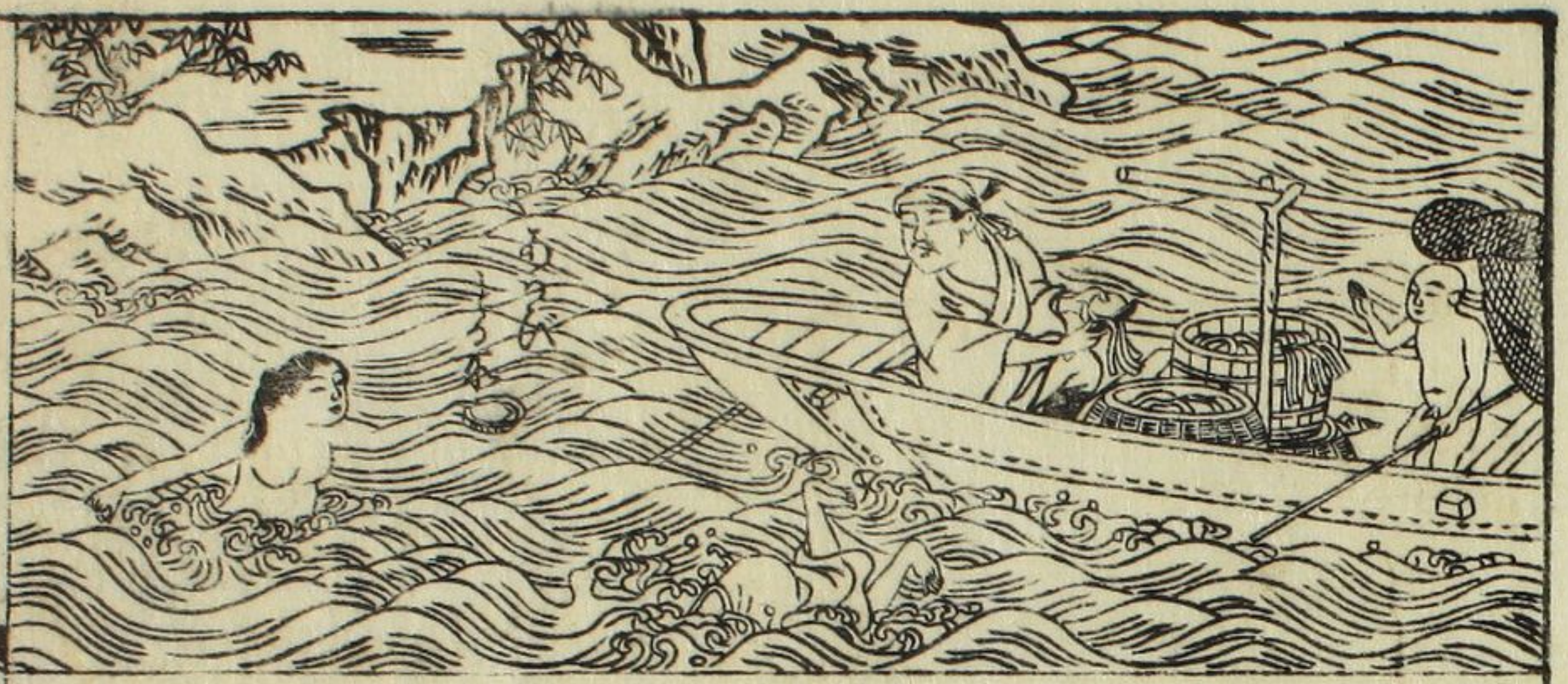


洗濯せんたく
 家の内うち静しずかな
 洗濯せんたくは
 静しずかな
 洗濯せんたくは
 静しずかな
 洗濯せんたくは
 静しずかな



掃除そうじ
 家いえと
 龍りゆうは
 基もとと
 又また早はやい者ものと
 彼かれの
 氣き合あは
 らぬと
 怒いかり
 多おほく

昔の海老は女漢師なり
 ありふ縄とほけくあり
 入てあひひさひあーの報
 をころりてあひんころり
 所あささうどうは時あふり
 引あささあーくすれあ魚
 ろくまふ命ところりあ
 ありやころりあさささ
 ろろここれ合浦といふあ
 畔恰のまきありて珠の如
 ろこまふがそのあ乃 役人
 あまに珠とととと
 ありあささあふも修習
 馬珠とてあささひよりあ
 をとととあささあささ
 とまころりあささあささ
 いばる珠と
 下なり



海老の過
 思く怒れへん
 心中の内よあわり
 外よあわり
 を固刻くあ
 心
 外
 を固刻くあ

悟りつる
 無へあへよ事
 と誠と情
 他家
 用
 悟りつる
 無へあへよ事
 と誠と情
 他家
 用

舟女ふねむのしほのやうり
 海うみはらへりのありは
 ん誘よびひるそのあり
 かりしらすんでうら
 女むすめのしほのやうり
 舟ふねのりつものま
 の女むすめのしほのや
 海うみのうらゝま
 おとね人ひとまらびる
 娘むすめふりか
 やせまゝにうら
 ちたてお舟ふねの
 ちかゞんかどつ
 小舟こぶねのしほの
 見みえまゝに
 舟ふねのあり
 舟ふねのあり



者もの一ひと人ひとの心こころ極たま
 海うみの
 一ひと人ひとの心こころ極たま
 の心こころ極たま
 心こころ極たま
 心こころ極たま
 心こころ極たま
 心こころ極たま
 心こころ極たま
 心こころ極たま
 心こころ極たま

人ひとと海うみと油あぶらと
 智ち恵え海うみと心こころ
 又また疾はやし十じゅう人にんと七しち
 八はちかみあり是これ婦ふ
 人ひとの男おとこ一ひと及およ
 人ひとと海うみと油あぶらと
 智ち恵え海うみと心こころ
 又また疾はやし十じゅう人にんと七しち
 八はちかみあり是これ婦ふ
 人ひとの男おとこ一ひと及およ

高き女を賤しむるは
 門前より入るひはたき
 牙磨いなるひはたき
 だすあひひて是れ
 物さし小石物のついで
 びつと藤を又も同巻、付
 ぶく人のひひと高
 すり女を男にさうさく
 らんやさくさうさく
 とあり又ささあさふ
 ひうあさあさあさあ
 ぶひあさあさあさあ
 さあさあさあさあさあ
 女を男にかさくさく
 女を男にかさくさく
 さあさあさあさあさあ
 さあさあさあさあさあ



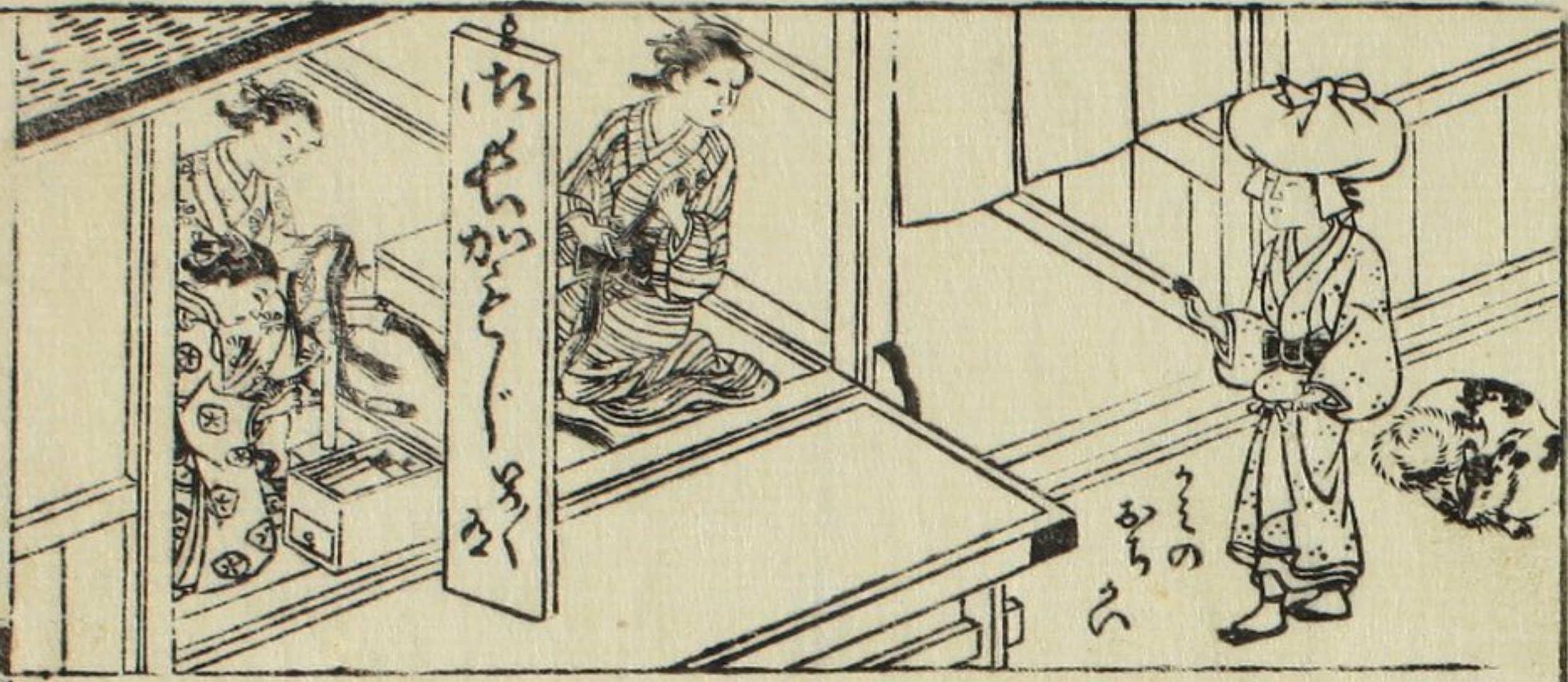
そのあひ
 女あさん
 うてい

さあさあさあさあ
 頑戒と改法
 申さるる智恵
 浅由一又の疾
 色あがる女の陰性

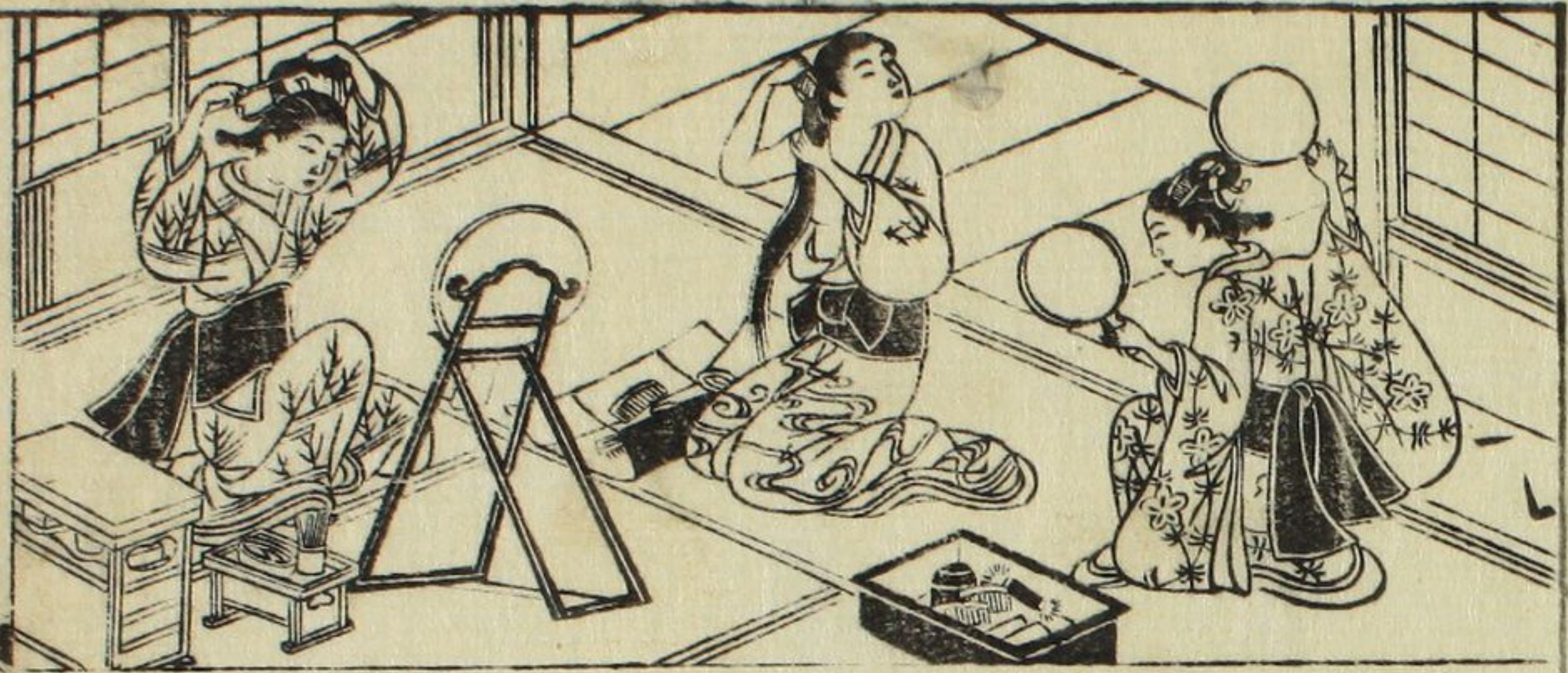
たり陰の疾
 晴所は女の男
 目あがるて後
 とも知らぬ

士の藝由よこの天武天皇
 ありとすまれりそ乃
 この女はこれにげがとる
 だ一五思大伴八坂
 慶の五百箇乃淨統を
 ありと藝藝をうび腕
 をまろひあよとありあれ
 そのせうまよ末のせり
 ありとわうくの名あま
 舞しまがううねまよ
 ありと。むまびまよ
 五門。くりのまよまよ
 ありとわぎ。竹のう
 のありありあめれまよ
 ありとあくまよまよ
 ありとまよまよまよ
 やはりの花女の風まよ
 ありとまよまよまよ

又人の郷を
 こととあはれわ
 中、あまよあま
 成へよまよまよ
 知ん村もあはれ



人とあまの
 わるひの人とあま
 まよくわが身独まよ
 せ思くど人よあま
 味まよまよまよあま



女の白粉をほろろと
 めの毀の付まをり弄ら
 后廻已とのひりが粉を
 せりとほろとのなる
 び行しろのまを粉
 持統天皇六年御門
 祝成といふ人粉を
 ほくまろのけりめなり
 ひと白粉を水垢を盥
 に入ぐやくをれをを
 本堂のしりろい糸を
 ひとほろのへり涼白粉
 と粉を袖圖越中を
 才一といふに白粉
 との男あしむまり女を
 おしりといふを
 白粉をのりた
 出せ
 ほろろなり

身みの仇かたきとことなること
 と知しれぬことはこの
 なくあさま後ご穢け子こと
 育そだままたひんをひり
 深かまかくましま勢せ
 身みとつら強かくましま陀だ
 身みの法はとこ子こ
 とう産うじま二に日に床との

身みの仇かたきとことなること
 と知しれぬことはこの
 なくあさま後ご穢け子こと
 育そだままたひんをひり
 深かまかくましま勢せ
 身みとつら強かくましま陀だ
 身みの法はとこ子こ
 とう産うじま二に日に床との

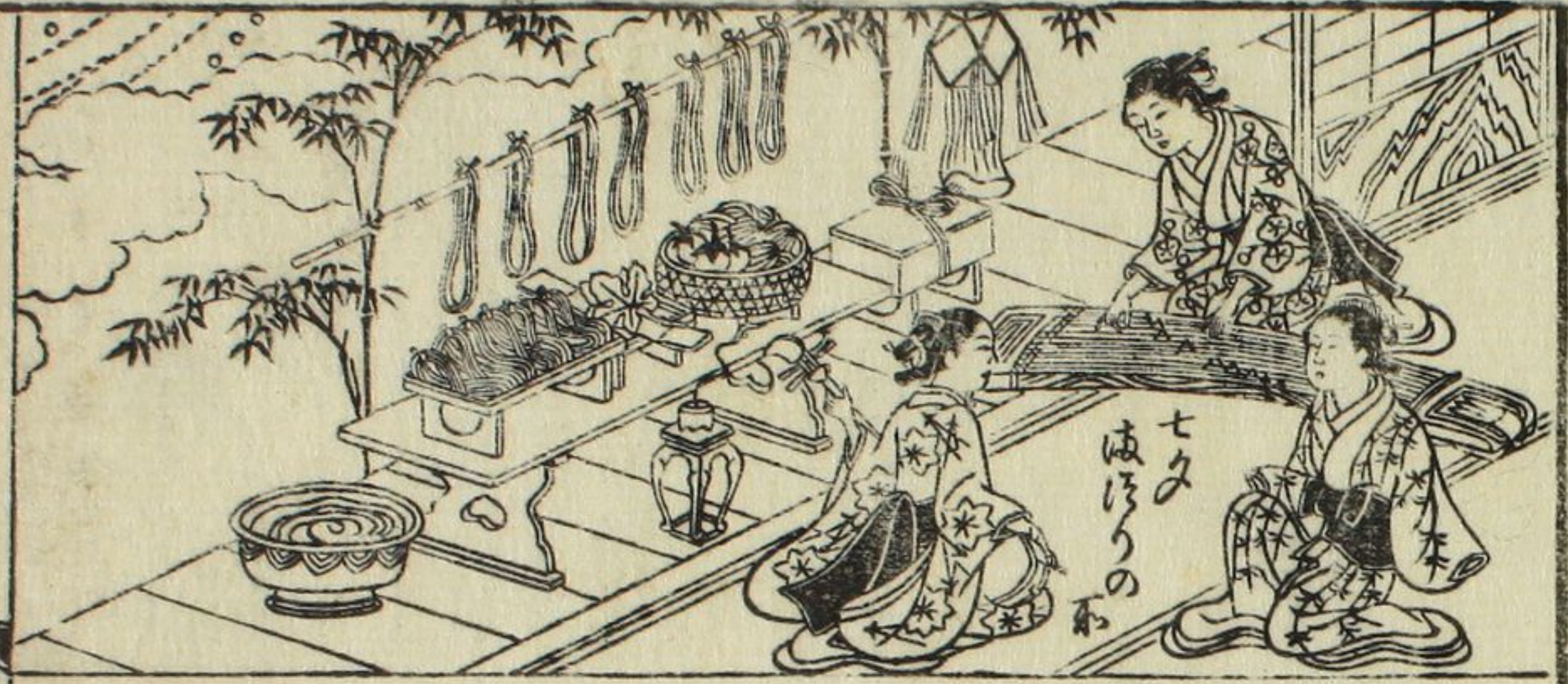
女の衰脂をけつるゝあふ
 ゐれも姐已燕とわらふれ
 びたどよりく脂とあ
 て面とふりてくさる
 入 燕脂を名とせり
 類 紅の縁和やい人
 鄧 夫人といふ美女とて
 のいでしに水晶の如意
 をとりあゆみとてあや
 まりて顔のあやとて
 ほどとて思しは醫師白
 粉をそ膏うしはきり
 そのまじれ痕あつくのり
 てらうらうらとてよ女
 手ひくみをはきとて
 けりて下まけりやま
 叔 掃花といふ
 石 花乃
 ちとせり

下に所へ切ると
 穴に是も割の
 毛は熊女の地に
 名がゆへに美
 したつとてさ
 心

五 倍子鉄漿に和して齒
 を潔くあとのゆき
 本 夷の風ゆき男と文
 歯をきくともあつり
 走 風ゆきんをたふ
 うの歯をゆきする
 ちれであつてさる
 又 眉をそりてさる
 ちとらうと春の代
 好るとなり又唐れ
 皇 帝の時十眉乃
 つのくのりやあり
 をさにも女婦の女
 笑とけりし初りて
 ちら 堯舜の時う
 露 牙 玳瑁をゆき
 ちるとして今世り
 別 言くをり

史と先立の家
 と後少我なる
 事には能と
 とては心なく
 亦 忍とあて

七夕のついでに若狭陽謀
 武丁といふ若狭七月初七日乃
 織女宿河をこりて七
 わたなちこれにひびき
 さらさらやまのりほりてさ
 くの尻加藤をさそりてさ
 まるごとをひきかきしり
 そのまうりたつ身は若狭の
 せしと果とみわらふ物
 かみぬいさく星の輝き
 けしておひ竹を七尺ぬ
 ろりてつらちりしとそ
 ろたふらふとせとらほひ
 のまきくくひさかたりま
 香いふた理をさし七
 かりんちあふ
 庭の南へひびきさる
 しのまきとまきりら
 のつらり風



七夕のついでに
 若狭のついでに
 武丁といふ若狭
 七月初七日乃
 織女宿河をこり
 て七
 わたなちこれに
 ひびき
 さらさらやまの
 りほりてさ
 くの尻加藤をさ
 そりてさ
 まるごとをひき
 かきしり
 そのまうりたつ
 身は若狭の
 せしと果とみわ
 らふ物
 かみぬいさく星
 の輝き
 けしておひ竹を
 七尺ぬ
 ろりてつらちり
 しとそ
 ろたふらふとせ
 とらほひ
 のまきくくひさ
 かたりま
 香いふた理をさ
 し七
 かりんちあふ
 庭の南へひびき
 さる
 しのまきとまき
 りら
 のつらり風

七夕のついでに
 若狭のついでに
 武丁といふ若狭
 七月初七日乃
 織女宿河をこり
 て七
 わたなちこれに
 ひびき
 さらさらやまの
 りほりてさ
 くの尻加藤をさ
 そりてさ
 まるごとをひき
 かきしり
 そのまうりたつ
 身は若狭の
 せしと果とみわ
 らふ物
 かみぬいさく星
 の輝き
 けしておひ竹を
 七尺ぬ
 ろりてつらちり
 しとそ
 ろたふらふとせ
 とらほひ
 のまきくくひさ
 かたりま
 香いふた理をさ
 し七
 かりんちあふ
 庭の南へひびき
 さる
 しのまきとまき
 りら
 のつらり風

東申儀の事ハ人の家に
 三ツの心算と申ありて
 一人の心算はむその心算
 二人の心算はむその心算
 三人の心算はむその心算
 四人の心算はむその心算
 五人の心算はむその心算
 六人の心算はむその心算
 七人の心算はむその心算
 八人の心算はむその心算
 九人の心算はむその心算
 十人の心算はむその心算



夫と保家
 結婚
 子と家
 知く十
 して子と

夫と保家
 結婚
 子と家
 知く十
 して子と

婦人の心をあつらふのめ
 ること難言をたて男がれ
 おせとのんぐくのえいむを
 いと目さるゝひみのSana
 かくこれおののそしゝるら
 どあうしめさのあしうや
 ぼんはなひくば家とを
 うらへ備のたてしゝるら
 山休さるゝとてさしうい
 づらこれづられしゝるら
 山やまの神のほかにのんぞふ
 海とのたにのりひいめい
 ぼそとの神やゝゝゝ
 づらしゝるらとをいひて
 さしゝるら今まふ
 かくめは生とてまき
 づらしゝるら

益軒貝原先生述
 知んばわらへ
 誠なり女子の
 知んばわらへ

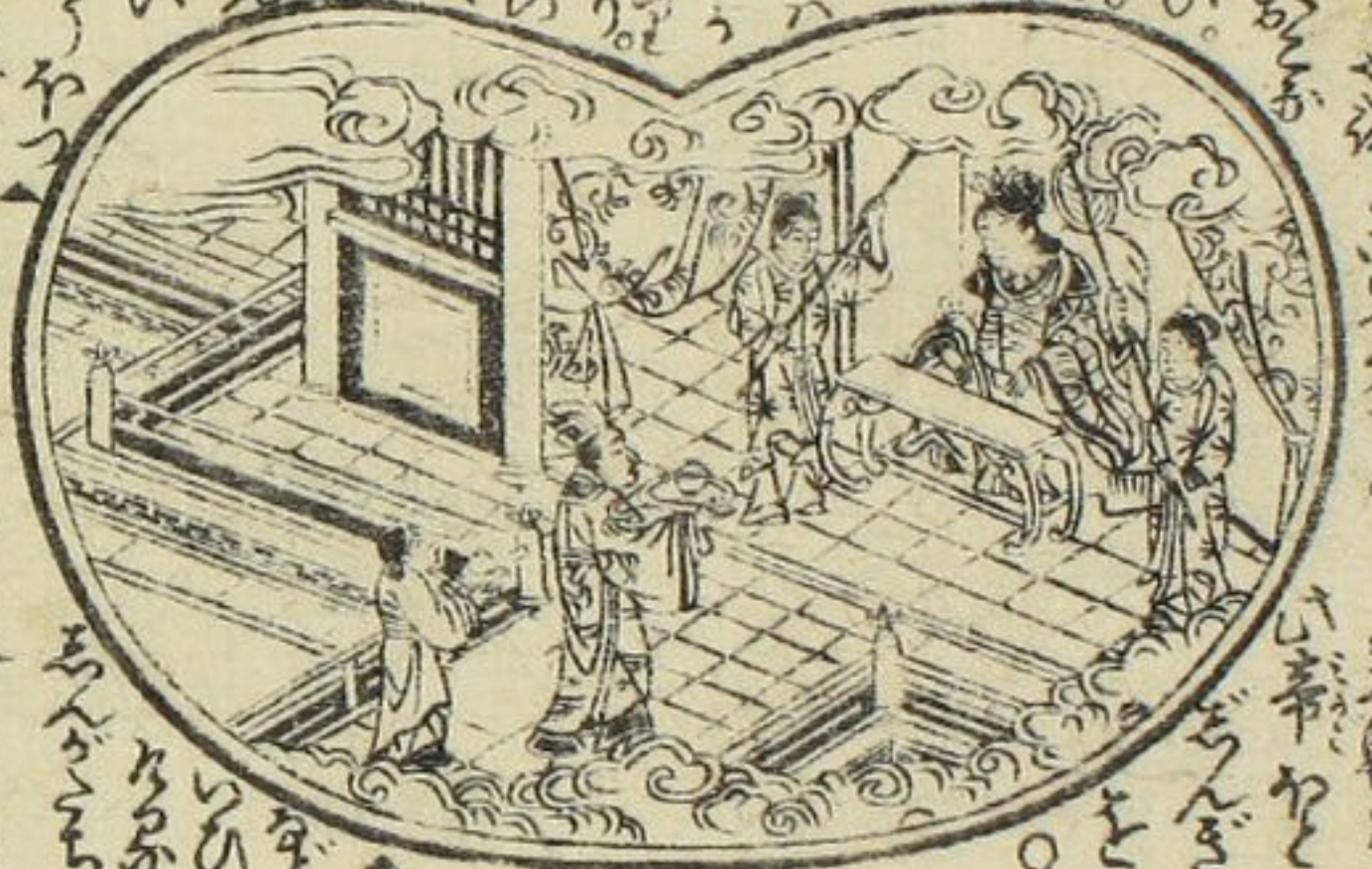
天智天皇
 秋の田舎
 我妻は
 持統天皇
 山崎
 田子乃乃
 亦あつたれ
 白くつたれ



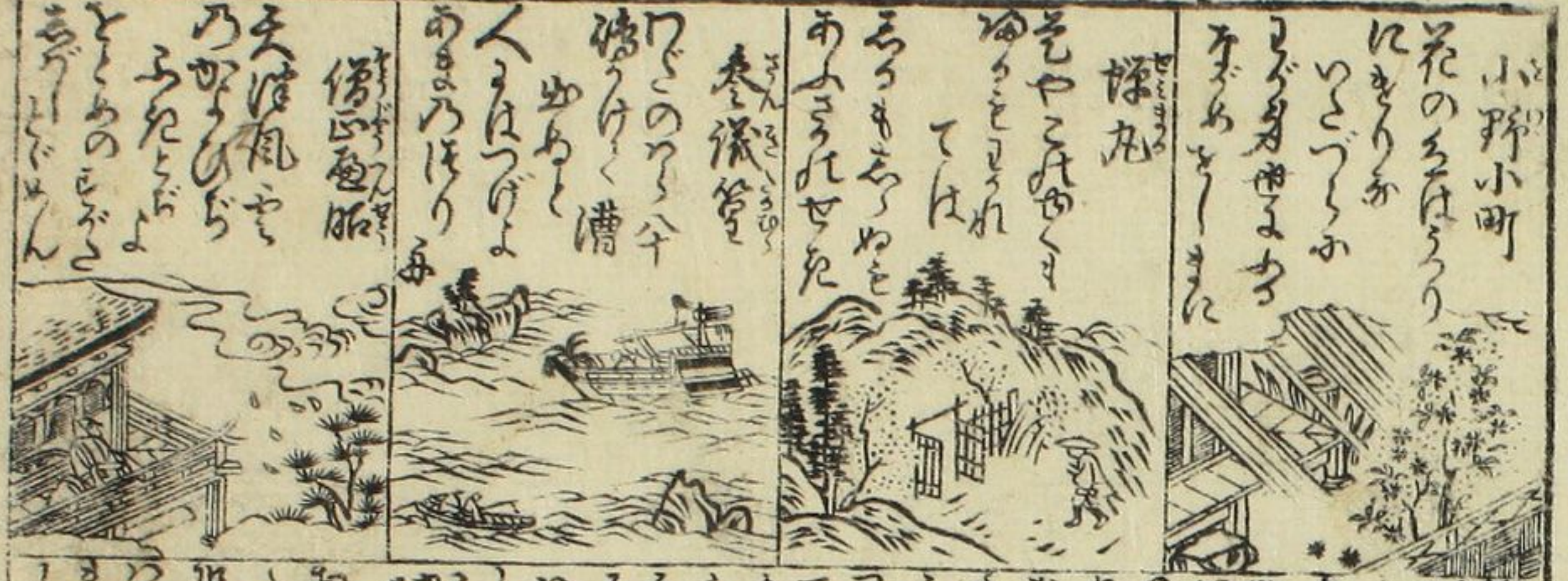
世詞
 夫は上小のまはまの位より下
 何事六女はとらなりままを
 生ずるとは命のたつた
 嫌しては生ずるとは命のたつた
 のまはまはまの位より下
 さつたそのまはまの位より下
 名臣の位より下はまの位より下
 敬明の位より下はまの位より下
 のらまはまの位より下はまの位より下
 世はまはまの位より下はまの位より下
 世はまはまの位より下はまの位より下
 世はまはまの位より下はまの位より下
 世はまはまの位より下はまの位より下



安倍仲丸
 赤尾直邦
 此の山は安倍仲丸の
 赤尾直邦の山なり
 此の山は安倍仲丸の
 赤尾直邦の山なり
 此の山は安倍仲丸の
 赤尾直邦の山なり



此の山は安倍仲丸の
 赤尾直邦の山なり
 此の山は安倍仲丸の
 赤尾直邦の山なり
 此の山は安倍仲丸の
 赤尾直邦の山なり
 此の山は安倍仲丸の
 赤尾直邦の山なり

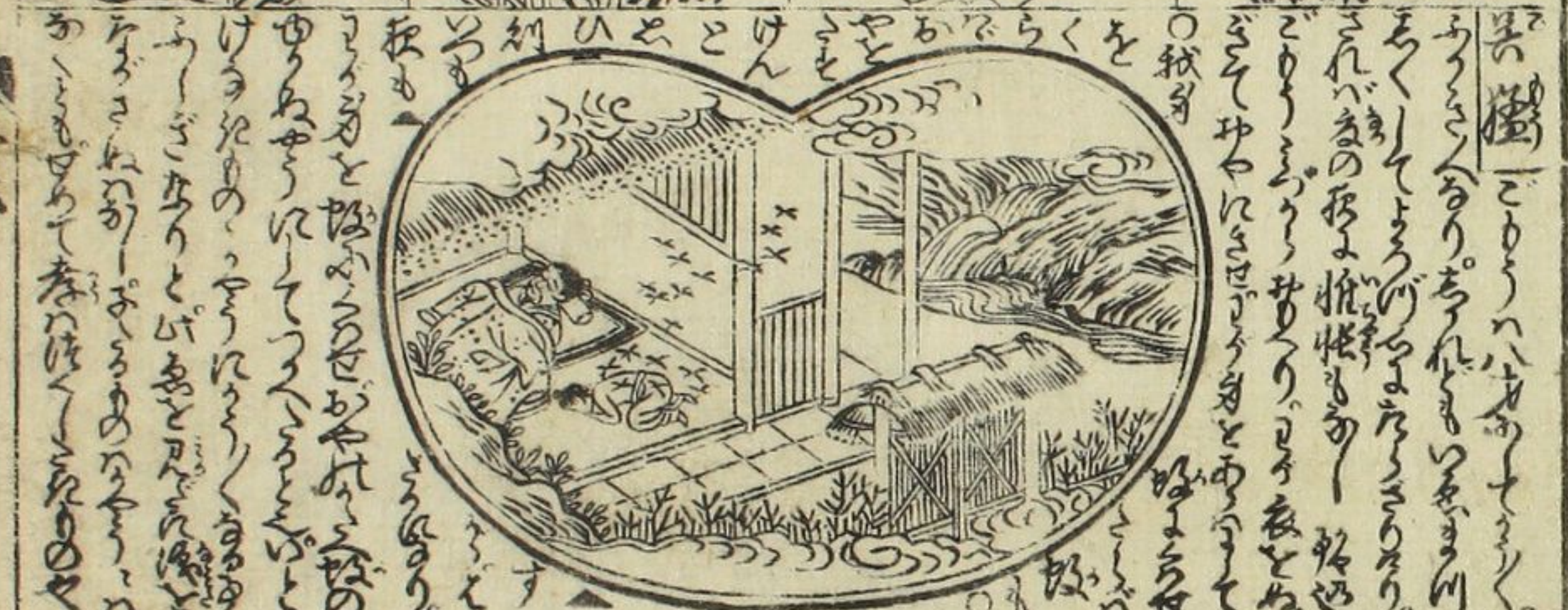


小野小町
 花のよはらうり
 此の山は小野小町の
 花のよはらうりの山なり
 此の山は小野小町の
 花のよはらうりの山なり
 此の山は小野小町の
 花のよはらうりの山なり



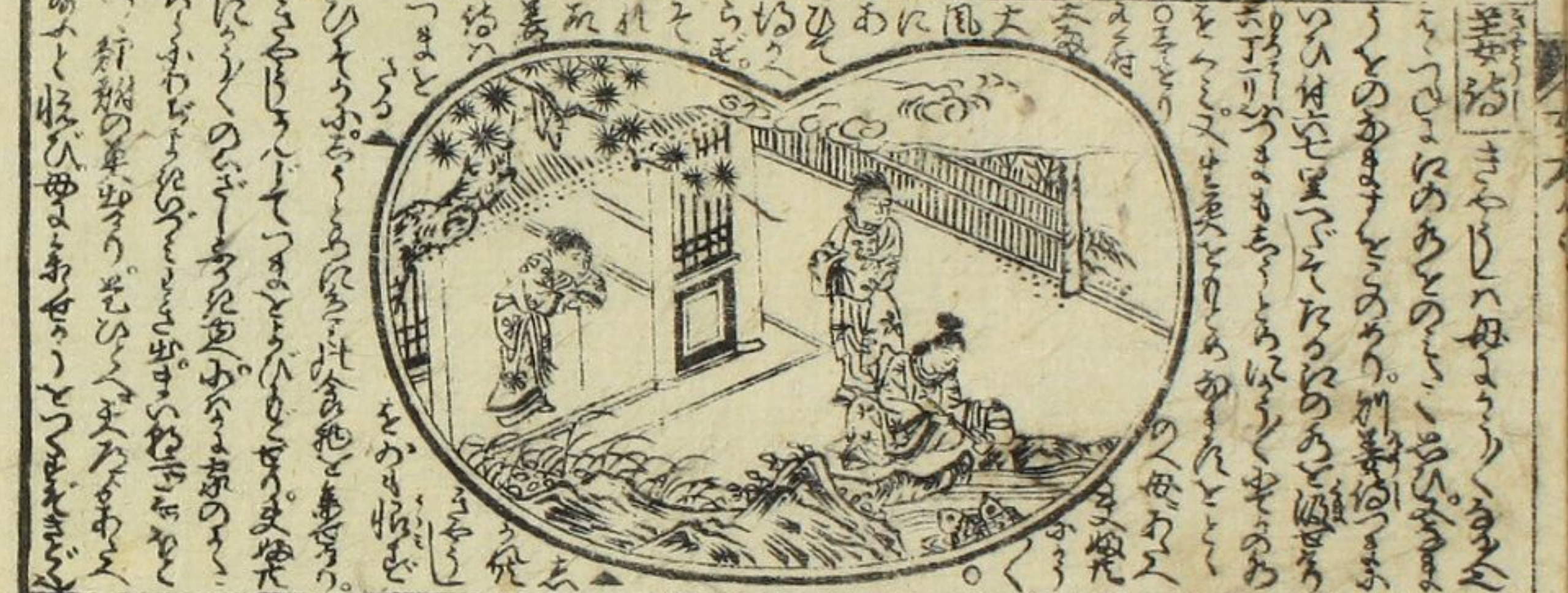
此の山は小野小町の
 花のよはらうりの山なり
 此の山は小野小町の
 花のよはらうりの山なり
 此の山は小野小町の
 花のよはらうりの山なり
 此の山は小野小町の
 花のよはらうりの山なり

三條右大臣
 名のついでに
 お坂山の上の
 うらふらふ
 さうらう
 小倉山の上の
 今一ひら
 浄土
 直信
 中納言
 久保
 あつめ
 藤原
 山王
 源氏



今一ひらの
 浄土
 直信
 中納言
 久保
 あつめ
 藤原
 山王
 源氏

新撰法印
 今一ひら
 お坂山の上の
 うらふらふ
 さうらう
 小倉山の上の
 今一ひら
 浄土
 直信
 中納言
 久保
 あつめ
 藤原
 山王
 源氏



今一ひらの
 浄土
 直信
 中納言
 久保
 あつめ
 藤原
 山王
 源氏

文房の筆
白雲の風乃
ふさしを
秋の日は
ほのぼそと
あざりきる



揚子江の
舟の父を
あつりきる
父の命を
あつりきる
母の命を
あつりきる
子の命を
あつりきる

壬子年
あつりきる
あつりきる
あつりきる
あつりきる
あつりきる



小児生
十月の
十一月の
十二月の
一月の
二月の

御徳云

あれこれいふ
がたんを
おまかせ
身のいづつふ
ありあま



ゆくのうを
こころみ人
わらとこ
ゆきもあま
まひ乃乃か



あまのこ
あまのこ
あまのこ
あまのこ



あまのこ
あまのこ
あまのこ
あまのこ



郭巨

郭巨の事
郭巨の事
郭巨の事
郭巨の事



郭巨の事
郭巨の事
郭巨の事
郭巨の事

十三日月十五日
十三日月十五日
十三日月十五日
十三日月十五日

十三日月十五日
十三日月十五日
十三日月十五日
十三日月十五日

十三日月十五日
十三日月十五日
十三日月十五日
十三日月十五日

十三日月十五日
十三日月十五日
十三日月十五日
十三日月十五日

大中に能く
仲はあまの
くく火に
おひかえて
ひのきしほ
おひかえて

おひかえて
おひかえて
おひかえて
おひかえて

おひかえて
おひかえて
おひかえて
おひかえて

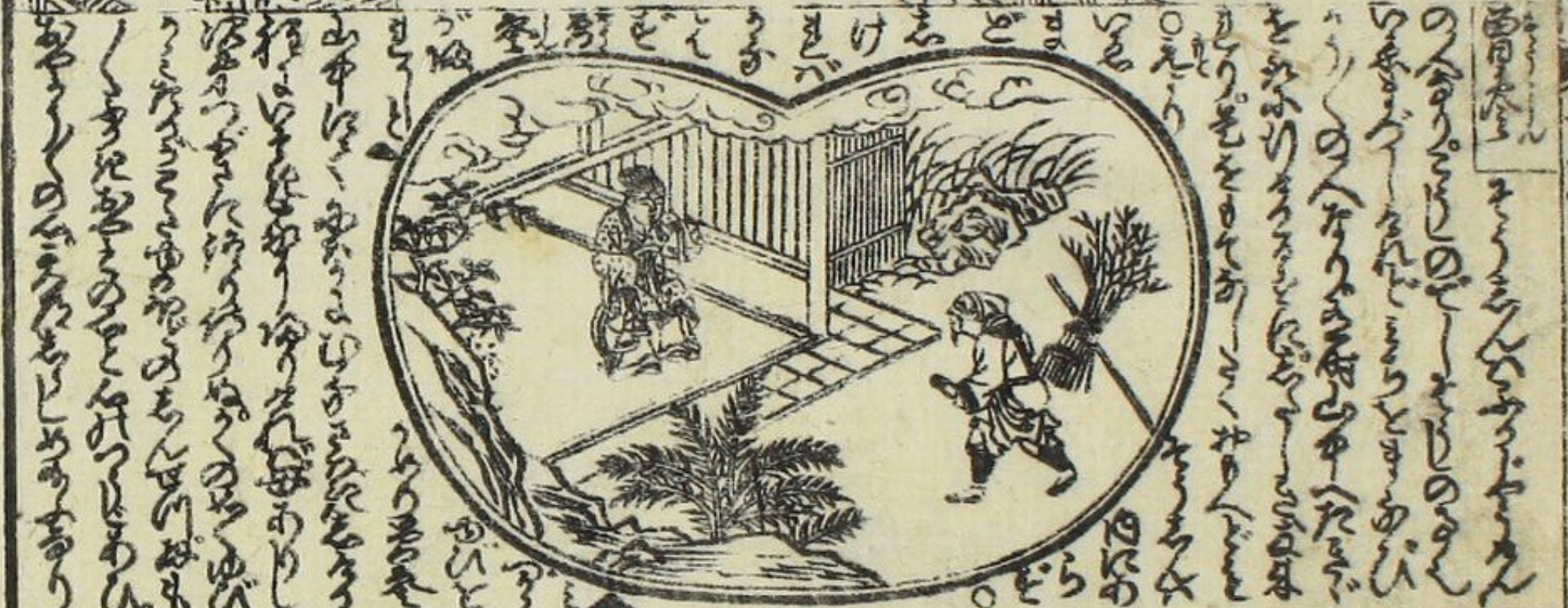
おひかえて
おひかえて
おひかえて
おひかえて

おひかえて
おひかえて
おひかえて
おひかえて

おひかえて
おひかえて
おひかえて
おひかえて

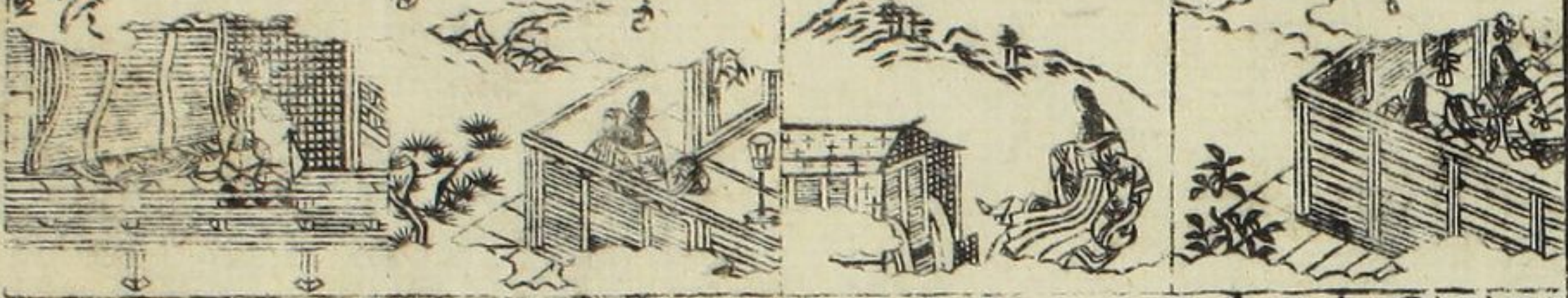
おひかえて
おひかえて
おひかえて
おひかえて

大徳寺... 徳... 徳... 徳...
徳... 徳... 徳... 徳...
徳... 徳... 徳... 徳...
徳... 徳... 徳... 徳...



五香湯... 五香湯... 五香湯...
五香湯... 五香湯... 五香湯...
五香湯... 五香湯... 五香湯...
五香湯... 五香湯... 五香湯...

徳... 徳... 徳... 徳...
徳... 徳... 徳... 徳...
徳... 徳... 徳... 徳...
徳... 徳... 徳... 徳...



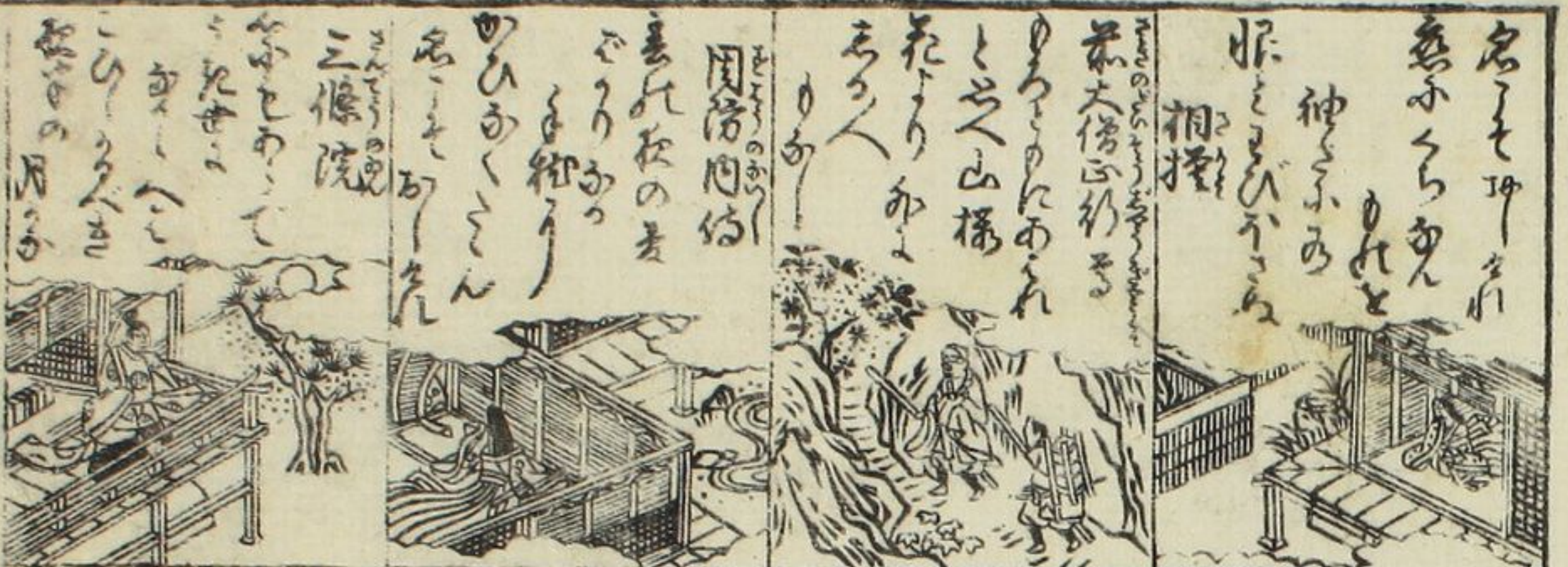
五香湯... 五香湯... 五香湯...
五香湯... 五香湯... 五香湯...
五香湯... 五香湯... 五香湯...
五香湯... 五香湯... 五香湯...



伊勢の
 中津の
 白ひら
 伊勢の
 中津の
 白ひら
 伊勢の
 中津の
 白ひら



伊勢の
 中津の
 白ひら
 伊勢の
 中津の
 白ひら



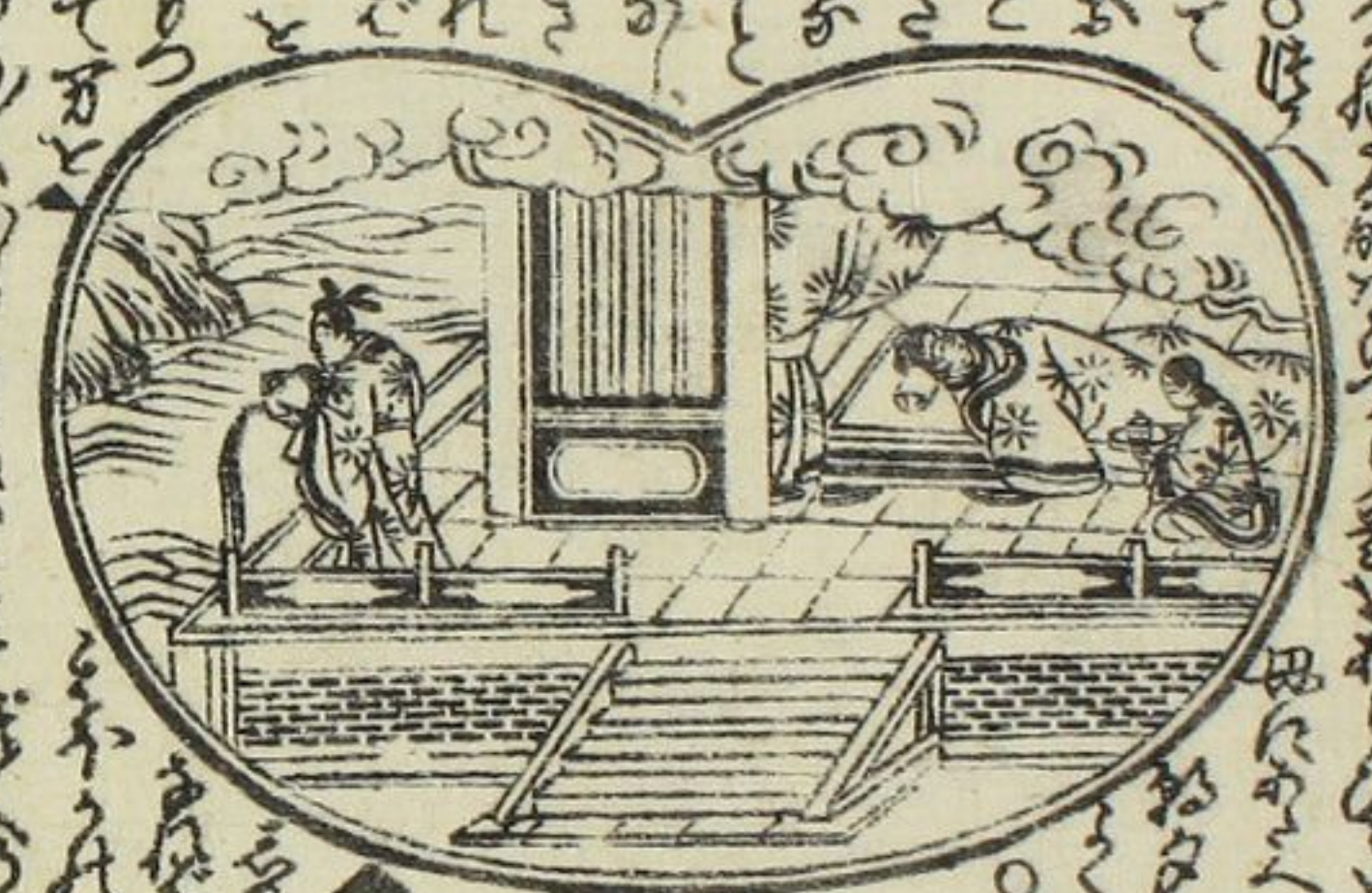
名も
 伊勢の
 中津の
 白ひら



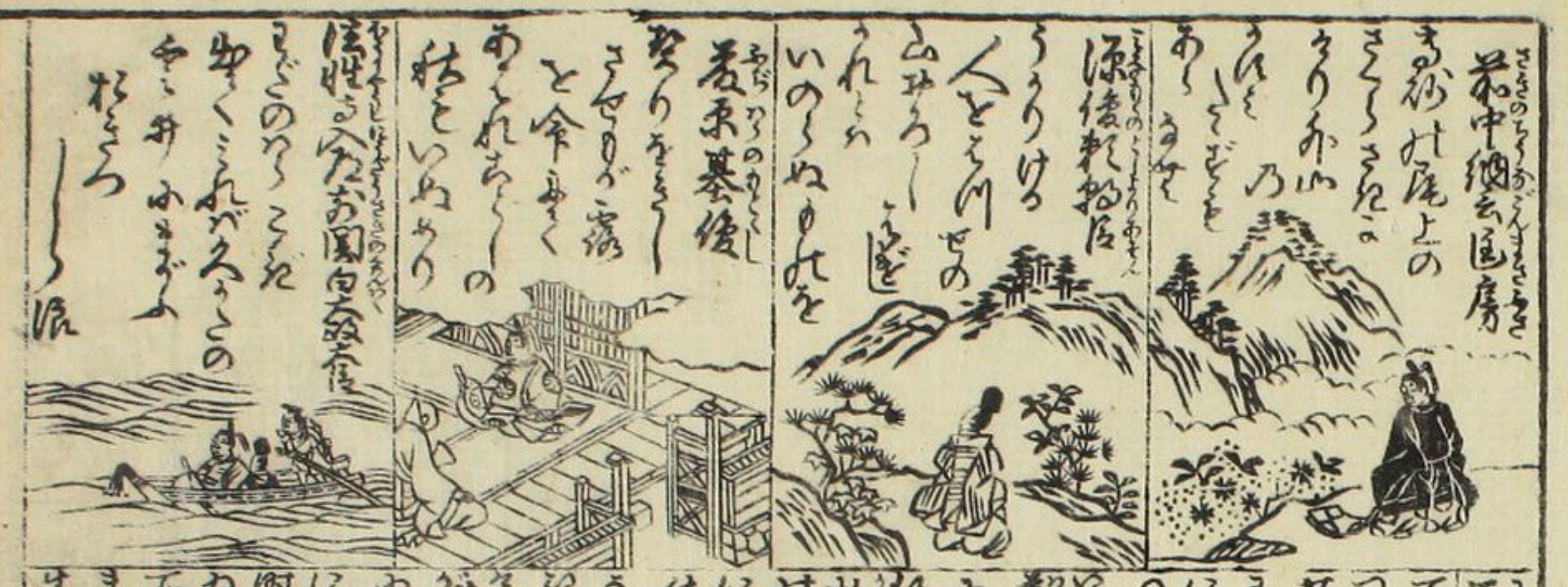
伊勢の
 中津の
 白ひら



山吹の山... 大徳寺の御宇... 夜通法師... 新田の川の... 山吹の山... 大徳寺の御宇... 夜通法師... 新田の川の...



山吹の山... 大徳寺の御宇... 夜通法師... 新田の川の... 山吹の山... 大徳寺の御宇... 夜通法師... 新田の川の... 山吹の山... 大徳寺の御宇... 夜通法師... 新田の川の...



山吹の山... 大徳寺の御宇... 夜通法師... 新田の川の... 山吹の山... 大徳寺の御宇... 夜通法師... 新田の川の... 山吹の山... 大徳寺の御宇... 夜通法師... 新田の川の...



山吹の山... 大徳寺の御宇... 夜通法師... 新田の川の... 山吹の山... 大徳寺の御宇... 夜通法師... 新田の川の... 山吹の山... 大徳寺の御宇... 夜通法師... 新田の川の...

後鳥羽院
御中
御幸の御座り
御座り

御座り
御座り
御座り

御座り
御座り
御座り

御座り
御座り
御座り

御座り
御座り
御座り

御座り
御座り
御座り

御座り
御座り
御座り

御座り
御座り
御座り



御座り
御座り
御座り

御座り
御座り
御座り



御座り
御座り
御座り

御座り
御座り
御座り

女中のいふいさぎの書物目録

女大寺寶物目録
善妙阿彌陀佛に相
 去り方保成地所
 百人一冊 一冊

女用智惠鑑
女用智惠鑑
 用之書女代針大和書
 女中目録の書物の目録
 百人一冊 一冊

女文選抄紙箱
百人一冊
 百人一冊 一冊

從言海伽文庫
いふの言うる箱入
 百紙しくをあげ廿三冊 一冊

女用文章急車
文章急車
 女中目録の書物の目録
 百人一冊 一冊

女用文章傳御
文章傳御
 女中目録の書物の目録
 百人一冊 一冊

女文庫言辭法
文章急車
 女中目録の書物の目録
 百人一冊 一冊

女童子付束
百人一冊
 女中目録の書物の目録
 百人一冊 一冊

百福百人一首
善妙阿彌陀佛に相
 去り方保成地所
 女中目録の書物の目録
 百人一首 一冊

百寶百人一首
善妙阿彌陀佛に相
 去り方保成地所
 女中目録の書物の目録
 百人一首 一冊

聖泰百人一首
善妙阿彌陀佛に相
 去り方保成地所
 女中目録の書物の目録
 百人一首 一冊

万玉百人一首
善妙阿彌陀佛に相
 去り方保成地所
 女中目録の書物の目録
 百人一首 一冊

英玉百人一首
善妙阿彌陀佛に相
 去り方保成地所
 女中目録の書物の目録
 百人一首 一冊

寶玉百人一首
善妙阿彌陀佛に相
 去り方保成地所
 女中目録の書物の目録
 百人一首 一冊

宝素百人一首
善妙阿彌陀佛に相
 去り方保成地所
 女中目録の書物の目録
 百人一首 一冊

袖本百人一首
善妙阿彌陀佛に相
 去り方保成地所
 女中目録の書物の目録
 百人一首 一冊

伊勢物語
伊勢物語
 百人一冊 一冊

万葉伊勢物語
万葉伊勢物語
 百人一冊 一冊

古今伊勢物語
古今伊勢物語
 百人一冊 一冊

女御法紀
女御法紀
 百人一冊 一冊

女御今川
女御今川
 百人一冊 一冊

女大寺子奉
女大寺子奉
 百人一冊 一冊

貝魚浦糸綿
貝魚浦糸綿
 百人一冊 一冊

琴女組
琴女組
 百人一冊 一冊

童子訓
童子訓
 百人一冊 一冊

万福百人一首
善妙阿彌陀佛に相
 去り方保成地所
 女中目録の書物の目録
 百人一首 一冊

大字百人一首
善妙阿彌陀佛に相
 去り方保成地所
 女中目録の書物の目録
 百人一首 一冊

高世雅うりれ上
善妙阿彌陀佛に相
 去り方保成地所
 女中目録の書物の目録
 百人一首 一冊

古今著聞集
古今著聞集
 百人一冊 一冊

英草紙
英草紙
 百人一冊 一冊

繁野信
繁野信
 百人一冊 一冊

撰法比事
撰法比事
 百人一冊 一冊

面鏡花子
面鏡花子
 百人一冊 一冊

繪本寫寶家
撰後人地志書とて改定
茶本もその一の扉月十冊
六十一巻の巻のついでに
六十一巻の巻のついでに

同 通寶志
撰後人の國書本八巻
仙人居居茶本も十冊
山崎の註のついでに

同 直指寶
撰後人の國書本八巻
武蔵の註のついでに
二冊

同 聖山草
撰後人の國書本八巻
武蔵の註のついでに
五冊

同 野山草後編
撰後人の國書本八巻
武蔵の註のついでに
五冊

同 忘抄
撰後人の國書本八巻
武蔵の註のついでに
一冊

同 勢古帳
撰後人の國書本八巻
武蔵の註のついでに
二冊

同 清書帳
撰後人の國書本八巻
武蔵の註のついでに
二冊

同 公乃種
撰後人の國書本八巻
武蔵の註のついでに
二冊

畫英
撰後人の國書本八巻
武蔵の註のついでに
六冊

畫寶
撰後人の國書本八巻
武蔵の註のついでに
六冊

押繪子鑑
撰後人の國書本八巻
武蔵の註のついでに
三冊

武勇傳
撰後人の國書本八巻
武蔵の註のついでに
二冊

武勇武者記
撰後人の國書本八巻
武蔵の註のついでに
五冊

畫卷
撰後人の國書本八巻
武蔵の註のついでに
七冊

繪字書
撰後人の國書本八巻
武蔵の註のついでに
三冊

同 和奇考
撰後人の國書本八巻
武蔵の註のついでに
二冊

同 千代の巻
撰後人の國書本八巻
武蔵の註のついでに
二冊

繪本寶鑑
撰後人の國書本八巻
武蔵の註のついでに
二冊

同 長徳周
撰後人の國書本八巻
武蔵の註のついでに
二冊

同 州源氏
撰後人の國書本八巻
武蔵の註のついでに
一冊

同 深山庵
撰後人の國書本八巻
武蔵の註のついでに
三冊

初学和式
撰後人の國書本八巻
武蔵の註のついでに
七冊

萩のふゆり
撰後人の國書本八巻
武蔵の註のついでに
二冊

和字正體抄
撰後人の國書本八巻
武蔵の註のついでに
五冊

新字假名巻
撰後人の國書本八巻
武蔵の註のついでに
一冊

右三外女史の事
撰後人の國書本八巻
武蔵の註のついでに
一冊

常道重宝記
撰後人の國書本八巻
武蔵の註のついでに
一冊

常藤袋
撰後人の國書本八巻
武蔵の註のついでに
一冊

小児酒法記
撰後人の國書本八巻
武蔵の註のついでに
一冊

和漢方家集
撰後人の國書本八巻
武蔵の註のついでに
箱入
十三冊

愛後考
撰後人の國書本八巻
武蔵の註のついでに
一冊

孔方圖鑑
撰後人の國書本八巻
武蔵の註のついでに
一冊

珠珠園
撰後人の國書本八巻
武蔵の註のついでに
一冊

雅遊漫録
撰後人の國書本八巻
武蔵の註のついでに
七冊

板元
撰後人の國書本八巻
武蔵の註のついでに
一冊

